令和４年３月版

山梨県学校防災指針
第２編　防災教育指導編

２章　防災教育指導案例・実践例

令和４年３月

山梨県教育委員会

目　次

防災教育指導編　２章　防災教育指導案例・実践例			ページ
Ⅰ　ＤＩＧによる防災教育	１ＤＩＧによる防災教育事前準備	(1) テーマ・役割等の決定 (2) ＤＩＧ実施に必要な資料・物品等	３ ３
	２ＤＩＧによる防災教育 オリエンテーション	(1) ＤＩＧ実施にあたりオリエンテーションの実施	４
	３ＤＩＧによる防災教育　初級編	(1) ＤＩＧによる防災教育　初級編（指導事項・学習活動・指導上の留意点）	５
	４ＤＩＧによる防災教育　中級編	(1) ＤＩＧによる防災教育　中級編（指導事項・学習活動・指導上の留意点）	７
	５ＤＩＧによる防災教育 応用・発展編	(1) ＤＩＧによる防災教育　応用編 (2) ＤＩＧによる防災教育　発展編	８ ８
	６ＤＩＧによる防災教育 参考資料	(1) パワーポイントによる進行（参考） (2) 平成２４年度に本県が実施した「防災教室」でのＤＩＧの流れ（参考） (3) 平成２５年度に本県が実施した「防災教室講習会」でのＤＩＧの流れ（参考） (4) 平成２５年度に本県が実施した「防災教室講習会」まとめ（参考） (5) 参加者が作成した防災マップとまとめ（参考） (6) 白地図の作り方（参考） (7) 関連文献（参考）	９ 10 10 11 12 13 14
Ⅱ　緊急地震速報受信システム	１　緊急地震速報受信システムを活用した指導案例　①	帰りの会（SHR）に実施。事前に児童生徒等へ避難訓練を行うことを知らせた上で、地震発生時、どのような状況でも安全な場所に素早く身を寄せて安全を確保することができるようにする訓練	15
	２　緊急地震速報受信システムを活用した指導案例　②	管理職以外の教職員や児童生徒等には知らさずに実施。それぞれの場所でどう行動したらよいか、事前に確認したことの検証を行う訓練	16
	３　緊急地震速報受信システムを活用した指導案例　③	放課後に実施。部活動等の活動中であったり既に下校していたりなど、様々な状況の児童生徒等がおり、安否確認が困難を要する状況に対する訓練	17
Ⅲ　幼稚園	１避難訓練における指導案例	室内での一斉活動中に起きた地震「震度５強」	18
Ⅳ　小学校	１　生活科における 指導案例　（１学年）	「がっこう　だいすき」	19
	２　道徳科における 指導案例（高学年）	「自分にできることを」	20
	３　社会科における 指導案例（４学年）	「自然災害から人々を守る活動－土砂災害にそなえるまちづくり－」	21
	４　理科における 指導案例（５学年）	「流れる水の働きと土地の変化」	22
	５　家庭科における 指導案例	「整理・整頓で安全・快適な生活」～整理・整頓は何のため？～	23
	６　学級活動における 指導案例①（低学年４月）	「授業中に地震が起きたらどうしたらよいか」	24
	７　学級活動における 指導案例②（高学年２月）	「地震の強さ」	25
	８　学級活動における 指導案例③（高学年保健指導）	「大きな災害の後で（心のケア）」	26

	9 避難訓練における 指導案例①（全学年）	「授業中の避難訓練（震度５強）」	27
	10 避難訓練における 指導案例②（全学年）	「業間休み時間中の避難訓練（震度５強）」	28
Ⅴ 小・中学校	1 総合的な学習の時間における 指導案例	「災害から考える」	29
Ⅵ 中学校	1 社会科における 指導案例（１学年）	「身近な地域のハザードマップを使ってみよう」	31
	2 社会科における 指導案例 （２学年）	「関東大震災から学ぼう」	32
	3 理科における 指導案例（１学年）	「地震による災害」	33
	4 保健体育科における 指導案例（２学年）	「傷害の防止」	34
	5 技術・家庭科（技術分野）における指導案例	「安全に電気を利用するための技術について考えよう」	35
	6 技術・家庭科（家庭分野）における指導案例	「災害に備えた住まい」～室内の安全対策～	36
	7 道徳科における 指導案例	「集団の中の自分の役割」	37
	8 学級活動における 指導案例 （全学年）	「自然災害と防災」	39
	9 避難訓練における 指導案例 （全学年）	「清掃中に起きた地震（震度５強）」	40
Ⅶ 高等学校	1 地理総合における指導案例	「生活圏の防災　ー火山災害を例にー」	41
	2 ＬＨＲ・総合的な探究の時間等における指導案例①	「自然災害（大規模地震、風水害、雪害、火山災害など）と防災」	42
	3 ＬＨＲ・総合的な探究の時間等における指導案例②	「災害（地震）発生時の対処方法」	43
	4 ＬＨＲ・総合的な探究の時間等における指導案例③	「災害発生時における救護方法と応急処置」	44
	5 ＬＨＲ・総合的な探究の時間等における指導案例④	「防災ボランティア活動」	45
	6 ＬＨＲ・総合的な探究の時間等における指導案例⑤	「災害時の心の健康について」	47
	7 ＬＨＲ・総合的な探究の時間等における指導案例⑥	「地域性を踏まえた防災（ハザードマップの活用）」	49
	8 【参考】	「地域の教育資源や学習環境の活用」	50
Ⅷ 特別支援学校	1 防災学習における 指導案例 【中等部】【高等部】	「地震から命を守ろう」	51
	2 避難訓練における 指導案例 【全学部】	「防災訓練」	52
Ⅸ 青少年	「青少年赤十字防災教育プログラム　まもるいのちひろめるぼうさい」の活用	・自然災害に向き合ってきた日本赤十字社と現場の教員が提案する、授業ですぐ使える防災教材 ・小学生から高校生まで対応 ・映像資料、指導案、ワークシート付	53

Ⅰ-1　ＤＩＧ（災害図上訓練）による防災教育　【小学校】【中学校】【高等学校】

１　ＤＩＧによる防災教育　事前準備

（１）テーマ・役割等の決定

① テーマの決定

事前準備でもっとも大切なことは、ＤＩＧのテーマを決定すること。

具体的には、「対象とする災害は何か」（例：東海地震、南海トラフ地震、富士山噴火、風水害、その他）、「対象とする地域をどこにするか」（例：＿町内会、＿小学校区、＿市など）、「レベルをどこに設定するか」（初級・中級・応用）といったことを決める。

② 学習する会場の決定

学習する対象児童生徒、教職員等とテーマが決まれば、人数にもとづいて学習する会場を手配する。

③ スタッフの役割分担の確認

スタッフの役割分担（例：進行役、受付、記録、会計等）や大まかな時間配分を考えておくとよい。

④ 会場設営

ＤＩＧの前に、会場に地図台となるテーブルを並べる。この作業は、学習する児童生徒等と一緒にやるとよい。会議用の机（180cm×45cm）なら、２本並べると畳大の地図を載せることができる。通常の教室の学習机では、並べたとしてもでこぼこがあるので使用には不適切である。机を使わず、床に地図を直接置くこともある。図書館等、大きな机を使用できる場所があるとよい。

（２）ＤＩＧ実施に必要な資料・物品等

① 対象とする地域の地図

自分の住むまちの住宅地図や都市計画図などを利用する。地図の大きさは、畳大が目安。テーマに応じて地図の縮尺を選ぶのがポイント。拡大コピーして貼り合せる必要がある場合もある。地図は、全てのグループが同じ地図を囲んでもいいし、地域を細分化して分担する形（＝地図はグループによって異なる）でも構わない。作業の進行状況を見ながらの工夫も必要である。

※市町村の地形図や都市計画図は、市町村の都市計画課や地域振興課、総務課等が作成しており、使用用途を明確にし、依頼をすることで、入手することができる。地形図や都市計画図の縮尺は、各市町村によって違いがある。各市町村担当課に相談をしたい。

ＤＩＧの対象とする地域による地図の縮尺については、次の表を参考にする。

ＤＩＧの対象地域	適当な地図や都市計画図の縮尺	備考（地図の種類、ＤＩＧの視点）
市町村	１／２５０００、１／５００００	地形図など、周辺地域とのつながり
市町村	１／１００００	地形図など、市町村内のつながり
小・中学校区	１／２５００、１／５０００	都市計画図など、都市や地域の特性
学校周辺、町内会	１／１５００、１／２０００	住宅地図など、身近な地域の特性

② 必要な文房具等小道具類

物品名	用途等
ペン（油性又は水性顔料）	太字・細字両用の１２色セットがおすすめ／地図に描き込む。
フエルトペン（黒・細字）	付箋に気付いたことを書く。模造紙に貼ったときに見やすい大きさで書く。
セロハンテープ （メンディングテープ）	地図や透明シートの貼り合わせをしたり、テーブルに固定したりするために使用 地図を繰り返し使う場合は、貼って剥がせる粘着力の弱いテープがおすすめ
はさみ、カッター	地図や透明シートの切断
付箋紙	地図上の表示は、2.5 ㎝×7.5 ㎝ or1.5 ㎝×5 ㎝のサイズで色は多数 意見の書き出しをして模造紙に貼る場合は、7.5 ㎝×7.5 ㎝のサイズで色は２色程度
丸型のカラーシール （ドットシール）	地図上に拠点等の情報を表示する。地図の縮尺や用途に応じてサイズや色が各種あると多彩な表示が可能　サイズは、20 ㎜・15 ㎜・８㎜など
模造紙	凡例の記載や意見の書き出しに使用

※地図に直接書き込まない場合は、透明シート・ペンジン等も必要となる。

③　対象とする地域の昔の地図（準備が間に合えば）

その土地の元々の自然条件を確認することは、防災を考える上で大切である。もともとどのような地形や土地利用であったかを知ることで、災害のおこる可能性なども想定することができる。国土地理院のホームページ（http://www.gsi.go.jp/MAP/HISTORY/5-25-index5-25.html）や埼玉大学教育学部が公開しているホームページ（今昔マップ on the web：http://ktgis.net/kjmapw/index.html）の活用も検討する。

④ 配布資料（できる限り、ＤＩＧの班や個人で用意させることも大切である。）

(a) 防災関連施設のリスト(避難所・救護所・広域避難所・物資集積場所等)

(b) 自治体作成の防災マップ、ハザードマップ、その他（パンフレット等）

２　ＤＩＧによる防災教育　オリエンテーション

（１）ＤＩＧ実施にあたりオリエンテーションの実施　（所要時間・・・１時間）

ＤＩＧを始める前に、ＤＩＧのルールを説明する。以下の手順で、分かりやすく説明する。

指導事項	学習活動	指導上の留意点	備考
① ＤＩＧとは何かを簡単に説明する。 ※ＤＩＧのイメージをつかませる。	①　ＤＩＧの目的や内容を知る。 ・先生の話をしっかり聞く。 ・ビデオ映像などでイメージをつかむ。	①説明には、下記の総務省消防庁の「防災・危機管理 e-カレッジ」のホームページから配信されているＤＩＧの様子の動画などを活用してもよい。 〈http://www.e-college.fdma.go.jp/〉	
② 進行のルールを説明する。	②　ＤＩＧの進め方を知る。 ・楽しく、活発に意見交換ができる雰囲気をお互いにつくる。 ・相手の意見をよく聞く。 ・異論があるときは、否定ではなく代案を提示する。	②個人情報は保護されるべきである。ＤＩＧの中で知りえた個人情報は他言を慎むようにすること。	
③ 雰囲気づくり：自己紹介とアイスブレイキング ※緊張した硬い氷のような雰囲気を壊すという意味で、「アイスブレイキング」と呼ばれる。	③　自己紹介を兼ねたアイスブレイキングをする。 「自分の名前と今日の朝食のメニューと好きな食べ物の話しをしてください」	③楽しみながら自由な雰囲気で意見を出し合うのがＤＩＧの重要なポイントなので、ＤＩＧに入る前に発言しやすい雰囲気づくりをする時間をとる。	
④ DIG の班の中の役割を決めさせる。	④　DIG の班の中の役割を決める。	④ 班の中で決めさせるが、リーダーとしてふさわしい児童生徒を選べるよう働きかけたい。	
⑤ 被害映像を見せ、災害のイメージをもたせる。 **（※注 1）**	⑤　災害のビデオや写真を見る。 **（※注 1）**	⑤学習者に災害のイメージがないと効果的なＤＩＧは行うことはできない。	
⑥ ＤＩＧの舞台となる地図の作成	⑥　ＤＩＧの舞台となる地図を作る。 (a)地図の余白を切り取り、テープで貼り合わせて１枚の大きな地図にする。 (b)貼り合わせた地図をテープでテーブルに固定する。 (c)地図の上から透明シートをかけ、さらにテープで固定する。	⑥ 透明シートに地図の四隅をペンで「」印をつけておけば、地図とシートがずれてもすぐに直せる。	

（※注 1）

●市町村役場や図書館には、災害に関するビデオがある。
●インターネットで災害についての写真や動画を探してみるのもよい。
●被害映像の閲覧できるホームページの例
(a)神戸大学附属図書館デジタルアーカイブ「震災文庫（デジタルギャラリー）」
〈 http://www.lib.kobe-u.ac.jp/eqb/dlib/index.html 〉
(b)総務省消防庁防災・減災ｅカレッジ」
〈 http://open.fdma.go.jp/e-college/ 〉
(c)内閣府　動画で学ぶ
〈 http://www.bousai.go.jp/movie.html 〉
(d)TEAM 防災ジャパン　防災資料室
〈 https://bosaijapan.jp/library/?category=disaster-education 〉
(e)国際火山学及び地球内部科学協会（IAVCEI）監修、火山災害に関する動画
〈 https://vimeo.com/volfilm 〉
(f)その他：自治体や報道機関のホームページ

３　ＤＩＧによる防災教育　初級編

（１）ＤＩＧによる防災教育 初級編（指導事項・学習活動・指導上の留意点）

（所要時間・・・１時間　※ＤＩＧの範囲によっては２時間以上かける場合もある。）

初級編は、《自然条件》、《都市構造》、《人的・物的防災資源》を地図に書き込みながら、まちの災害に対する強さ、弱さを確認していく。

指導事項	学習活動	指導上の留意点	備考
基本地図をつくる①、②、③			
○基本地図をつくる① ・現在の《自然条件》 ・昔の《自然条件》 先に紹介した国土地理院の昔の地形図を活用。 **○基本地図をつくる②** **○基本地図をつくる③**	**○基本地図をつくる①** 《自然条件》を確認して地図に書き込む。 ・現在の《自然条件》…市街地、山、平地、河川・池沼、海岸線・湖岸線など ・昔の《自然条件》（分かる範囲で）**（※注 1）** **○基本地図をつくる②** まちの構造《都市構造》都市を形づくっている鉄道や道路、建物等を確認して地図に書き込む。**（※注 1）** **○基本地図をつくる③** 地域の《人的・物的防災資源》を書き込む。地域の防災上、プラスにもマイナスにも働く施設や設備 **（※注2）**	・おおよそ決められた要領（後述の表）で、ペンでぬり絵をする。 ・色は決まっているわけではないが、地図が完成したときにイメージしやすい色を選択する。 ・ペンで書き込む際に、面積が広い場合には、塗りつぶさずに中に斜線を書く。 ・昔のことについては、あらかじめ地域の方や家族から聞き取らせておくとよい。 ・地域をよく知っている方にゲスト参加していたたくことも効果的である。 ・書き込み方は自由。地図記号や付箋、丸型カラーシールを使って表示する。	
作業のまとめ（課題について検討する）			
○作業のまとめ **（※注 3）**	○作業のまとめをする。 (a)書き込みが済んだ地図を見ながら、グループごとに次の項目を検討する。 ・この地域の特徴は？ ・防災・災害救援上のプラス要素は？　マイナス要素は？ (b)グループごとに発表し、参加者全員で発見を共有する。	○各自、一項目ずつ付箋に書き出す。重複があっても構わない。 ・ホワイトボードを使ったり、付箋に書き出したものを模造紙に貼ったりして、参加者全員が考えを共有できるような工夫をする。 ・まとめ、発表は、自らの発見を確認し、お互いの発見を共有するために不可欠。 ・時間が短い場合も一部の人に発言してもらうなどして行う。	

（※注 1） 基本地図をつくる①、②：地域の《自然条件》、《都市構造》を書き込む。

〔土砂災害・風水害・火山をテーマとした場合〕

項目	ペンの色
大きな川（川の水が流れる方向も矢印で記入する）	青色
小さな河川・用水路など	紫色
主要道路（国道や県道などから順に路肩をなぞる）	茶色
路地・狭隘（きょうあい）道路（消防車が入れないような狭い道路（幅２m以下）をなぞる）	ピンク色
鉄道	黒色
田畑（雨水を一時的にためておくことができる）	緑色
広場・公園・オープンスペース（所在地と広さを把握する）	黄色
（火山をテーマとした場合）過去の噴火口	赤色

〔地震をテーマとした場合〕

項目	ペンの色
鉄道（工場の引き込み線などの線路軌道も対象にする）	黒色
主要道路（国道や県道などから順に路肩をなぞる）	茶色
路地・狭隘（きょうあい）道路（消防車が入れないような狭い道路（幅２m以下）をなぞる）（ピンク色の線の多い所は、住宅が密集している地域が多く、火事が起きた際に延焼の危険度が高いだけでなく、消火活動もしにくい場合がある。また、避難路の確保も困難である）	ピンク色
広場・公園・オープンスペース（所在地と広さを把握する。学校・神社・田畑・空き地なども含める）	黄緑色
小さな河川・用水路など（水道が使えなくなったときの、消火用水や生活用水の入手場所を把握する）	青色
延焼を防ぐと思われる建物（延焼火災の時に延焼防止（焼け止まり線）になりそうな鉄筋コンクリート造の建物（ビル・マンション・デパートなど）。建物の輪郭をなぞる）	紫色

（※注 ２ ）基本地図をつくる③ ：地域の《人的・物的防災資源》を書き込む。

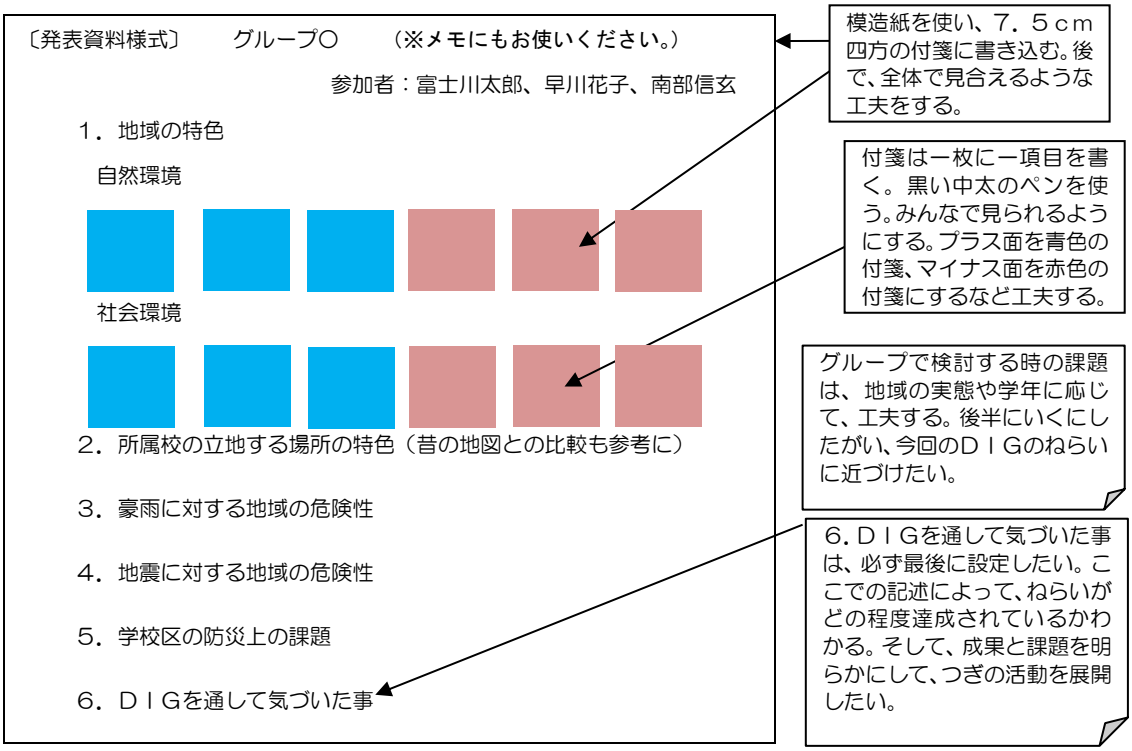
地域の防災上、プラスにもマイナスにも働く施設や設備。書き込み方は自由。地図記号や付箋、丸型カラーシールを使って表示する。

《**人的･物的防災資源**》とは？　→地域の防災上、プラスにもマイナスにも働くもの

施設分類	具体的な施設名	表示色例
官公署・医療機関など 防災活動・災害救援にかかわる機関や施設	市町村役場（支所や出張所）、消防署・警察署、学校・幼稚園、病院・医院、公民館・自治会館・社会福祉施設、ヘリポート、その他の公共施設　など	白
地域防災のために役立つ施設	避難地・避難所、救護所、食料・日用品・薬品・燃料等の販売店、防災倉庫、重機を保有する企業、可搬ポンプ・消防水利（防火水槽、街頭消火器、消火栓、プール）、風水害時に一時的に避難できる建物（３階建以上の鉄筋コンクリート造の建物）、水門・遊水地　など	黄
転倒・落下・倒壊した時に危険となる施設	危険物の貯蔵施設、ブロック塀・石垣、屋外広告物、自動販売機など	橙
人が集まる施設	ショッピングセンター、映画館、ホテル、テーマパーク、展示会、駅など	緑
地域防災に役立つ人材	自治会・自主防災リーダー、消防署・消防団のＯＢ・ＯＧ、医療・看護関係のＯＢ・ＯＧ、自治体職員のＯＢ・ＯＧ、建設や修理工関係者、民生・児童委員、通訳（外国語・手話）、福祉関係者	青
災害時要援護者のいる世帯	ひとり暮らしの高齢者、寝たきりの人、身体障害者、知的障害者、精神障害者、妊産婦、乳幼児を抱えた母親、外国人　など	桃

（※注 ３ ）　作業のまとめ　発表資料様式（例）

作業のまとめは、まとめというより、ＤＩＧの中で最も大切な場面である。基本地図をつくる作業によって、地域を見る目を広げて、そのことをもとに、防災上の課題について、検討していく場面になる。ここでは、「気づき」と「考える」ことが特に求められる。地域の防災上の課題に児童や生徒が自分たちで、具体的に「気づく」ような課題設定や検討の工夫をしたい。そして、その「気づき」をもとに、具体的な課題に主体に「考える」姿勢を育てたい。教師が防災上の危険な場所を「ここが危ない」と教えたり、危険な場面にあったときに「壁からはなれなさい」と教えたりする活動ではない。



４　ＤＩＧによる防災教育　中級編

（１）ＤＩＧによる防災教育 中級編（指導事項・学習活動・指導上の留意点）

初級編で作成した基本地図に、地域のハザードマップなどの情報を書き加え、どのような被害が生じるかをより具体的に検討していく。

指導事項	学習活動	指導上の留意点	備考
地域に起こり得る被害の書き込み			
①　地域に起こり得る被害を書き込ませる。 ②　「どこで」「何が」起こりうるか、想定させる。	① 初級編で作成した基本地図の上に新しくシートをかぶせ、想定される被害を書き込んでいく。 ② 付箋紙に「どこで」「何が」起こり得るかを洗い出す。	①　地域のハザードマップや被害想定調査結果などを利用して、例えば、「浸水想定区域」「崖崩れ・土砂崩れ危険箇所」「建物被害」「延焼火災」といった被害を書き込む。 ②　ハザードマップや被害想定調査結果は、個別具体的な被害の場所や状況を算出し得るものではない。そこで、「土地勘のある者」だけが持つ想像力をはたらかせて、具体的な場所に則して「どこで」「何が」起こるのかを書き出す。	
作業のまとめ			
③　作業のまとめ	③　作業のまとめをする。 (a)討議する。 ・甚大な被害を受ける地域内に、防災・災害救援に関わる重要施設はないか。 (b)交通路が寸断されることはないか。孤立する地域はないか。 (C)グループごとに発表し、参加者全員で発見を共有する。	③　これまでの作業で、まちに起こり得る被害の様相は、かなり詳しく浮き彫りにされている。ここで、左のポイントなどについて議論してみる。	

５　ＤＩＧによる防災教育　応用・発展編

（１）ＤＩＧによる防災教育 応用編

応用編では、初級編、中級編で確認した想定されるまちの被害を前提に、実際に土砂災害・風水害や大地震が発生した時の状況をイメージして、対策やその実行可能性を検討していく。

進行役は、日時（例：平日の午前６時、休日の午後３時）や天候、季節を設定し、仮想上のポイント（以下「特定ポイント」）で「災害や被害が発生した」という前提条件を参加者に伝え、「その場所で次のことが起こったら、皆さんはどう対応しますか？」などと問題提起をしていく。

参加者は、進行役が出した情報から、自分たちのまちに起こる事態を想像して、迅速に対応すべきことや地域の防災活動についてイメージトレーニングをする。

実践イメージトレーニング設問例

① 土砂災害・風水害・火山をテーマとした場合

(a)時間的に余裕がある場合の避難

特定ポイントから、どこの避難場所に、どのルートを通って避難するか考えてください。避難所に行くまでに、水（融雪型火山泥流）が溢れそうな川はないか、崖崩れや溶岩流等で通行できない箇所はないかなど、ルート上に危険箇所がないかを確認してください。また、近所の災害時要援護者（高齢者、障害のある方など）の避難の支援をどのようにするのか考えてください。

(b)時間的に余裕がない場合（急な増水、噴火など）の避難

急な増水（噴火）などにより、避難するタイミングを逃し、時間的に余裕がない場合の避難について考えてください。大雨の中を避難するのか、２階などに避難するのか（噴火の場合は、噴石を避ける強固な建物に避難する、融雪型火山泥流の場合は、強固な建物の高階層に避難する）など、自分はどのような行動を取るのかを考えてください。また、近所の災害時要援護者の方をどのように助けるかを考えてください。

② 地震をテーマとした場合

(c)発災直後における救出活動

特定ポイントのある地域の住宅が倒壊（大破）したと想定して、同地域の生き埋め者数を推計するとともに、どう救出したらよいかを具体的に考えてください。

例えば、被害想定の建物罹災数のデータを使用して、特定の町丁目の人口と生き埋め者数を推計してみるのもよい。１人の生き埋め者を救出するために、近隣で無事だった人たちが１０～２０人必要とされているとしたら、各グループが推計した生き埋め者数を１０～２０倍して、全人口と比較すると分かりやすい。

全人口の何割の人が救出活動をしなければならないのか検討し、生き埋め者数が少ないほど地域の負担も少ないことを認識して、住宅の耐震化を強調する。

(d)発災後数日を経過した場合の避難所運営

発災後数日が経った避難所に住民が集まり騒然としています。避難している住民の人数を推計するとともに、先ず、何をしたらよいか具体的に考えてみましょう。この設問では、特定ポイントのある地域の指定避難所における避難者数を推計し、指定避難所の収容人数と比較します。

混雑する避難所の様子をイメージするとともに、誰がどのように運営するのか、必需品はどのくらい必要で、どこから調達するのか考えましょう。在庫量の確認をすることも必要です。災害時要援護者やペット対策も忘れてはならないことです。

(e)下校中に大規模な地震が発生した想定で考えられる現象、児童生徒の行動、教師の行動について

学校の授業が終わり、児童生徒が下校しているときに大規模な地震が発生しました。作成した地図（河川、田畑、道路、主要施設などを色分けしたもの）を基に考えられる現象、児童生徒の行動、教師の行動について具体的に考えてみましょう。

実際に、自分たちの地域で起こる現象をイメージし、児童生徒のとる行動を予測して考えます。次に、学校として、また、教師としてとるべき行動を考えます。最悪の状態を想定し、携帯電話、メール等は使えない状況でできることは何かを考えることが必要です。

（２）ＤＩＧによる防災教育 発展編

ＤＩＧはテーマを変えて定期的に行ったり、他の活動と組み合わせたりするなどして、防災によるまちづくりに役立てる。また、ＤＩＧは防災に限ったものではなくさまざまな分野で活用できる手法である。現状の把握、問題への気づき、問題解決のアイデアを掘り起したいときなどに、ＤＩＧの手法を応用するとよい。

６　ＤＩＧによる防災教育　参考資料

（１）パワーポイントによる進行（参考）

県教育委員会では、次のパワーポイントによる資料等も作成しているため、必要に応じて利用するとよい。

①

DIGの目的

1　災害を知る

「どこで、どの規模で、どういう被害の発生が予想されるか」ということを地図に書き込み、自分の住んでいる地域で起こりうる災害の様相を具体的にイメージします

2　まちを知る

「まちの構造がどうなっているか」「危険な場所や災害時に役立つ施設はどこにあるのか」地図に具体的な要素を加えていくことによって、自分たちの地域の特徴を確認します

3　人を知る

「いざというときに頼りになる人はどこにいるのか」「近所に手助けが必要な人はいないか」人の情報は、地域や子供達にとって重要な情報になります。地域の防災ネットワークの基盤強化にも繋がります

②

DIGの流れ

防災マップの作成　○地図、略図を準備

① 基本地図をつくる1
② 基本地図をつくる2
③ 基本地図をつくる3
④ ・・・・・・・

グループ検討　ブレーン　ストーミング

○危険な場所、安全な経路等を話し合う

発　　表

○検討した内容を発表して共有する

③

DIGの流れ1

防災マップの作成　○地図、略図を準備

① 基本地図をつくる1
・自然条件を確認して地図に書き込む
市街地、山、平地、河川・池沼、海岸線・湖岸線などをマジックで表示します。

② 基本地図をつくる2
・まち・都市・地域を形づくっている鉄道や道路、建物等を確認して地図に書き込む

③ 基本地図をつくる3
・地域の人的・物的防災資源を書き込む

④

色分けの例　ペンの色は、下の色を基本に工夫して下さい。

項目	ペンの色
大きな川（川の水が流れる方向も矢印で記入する）	青色
小さな河川・用水路など（水道が使えなくなったときの，消火用水や生活用水の入手場所を把握する）	水色
主要道路（国道や県道などから順に路肩をなぞる）	茶色
路地・狭隘（きょうあい）道路（消防車が入れないような狭い道路（幅２ｍ以下）をなぞる）ピンク色の線の多い所は，住宅が密集している地域が多く，火事が起きた際に延焼の危険度が高いだけでなく，消火活動もしにくい場合がある。また，避難路の確保も困難である）	ピンク色
鉄道	黒色
田畑（雨水を一時的にためておくことができる	緑色
広場・公園・オープンスペース（所在地と広さを把握する。学校・神社・田畑・空き地なども含める））	黄色
延焼を防ぐと思われる建物（延焼火災の時に延焼防止（焼け止まり線）になりそうな鉄筋コンクリート造の建物（ビル・マンション・デパートなど）。建物の輪郭をなぞる）	紫色

⑤

DIGの流れ2

ｸﾞﾙｰﾌﾟ検討　ブレーン　ストーミング

① この地域の特徴は？
② 防災・災害救援上のプラス要素は？
③ 防災・災害救援上のマイナス要素は？
④ 起こりうる被害の状況は？
⑤ 被害を減災するための対策は？

発　　表

○検討した内容を発表して共有する

⑥

DIGの流れ2

ｸﾞﾙｰﾌﾟ検討　ブレーン　ストーミング

⑥通学路の危険箇所、安全な経路は？
⑦避難地・避難場所の確認と安全な避難経路は？
⑧地域で必要な防災対策(不足しているもの、達成しているもの、課題)は？

発　　表

○検討した内容を発表して共有する

⑦

DIGの流れ3　さらに深めよう！

防災マップの作成

① 基本地図に追加書き込みをする1
・過去の災害があれば地図に書き込む

② 基本地図に追加書き込みをする2
・昔の地図から、現在との違いを把握し、地図に書き込む

③ 基本地図に追加書き込みをする3
・地域のハザードマップの情報を書き込む

※今回はビニールシートを使いません。

⑧

基本地図に追加書き込みをする

地域で起こりそうな被害や危険な場所（ブロック塀が倒れる・ビルの窓ガラスが落ちてくる・土砂崩れ・橋が落ちる・倒壊家屋が路地を塞ぐ等）を検討し、水性マジックで表示し、必要なデータや選んだ理由等を付箋に書いて張ります。

記述例

・災害により使用できないおそれのある道路・橋
・山・崖崩れの危険予想地域
・液状化が予想される地域
等

（２）平成24年度に本県が実施した「防災教室」でのDIGの流れ（参考）

１．アイスブレイク（５分）
　自己紹介、リーダー・書記・発表者を決定

２．防災マップを作成（２５分）
1) 自然条件（河川、用水路、湖、ため池など）を地図に色を塗る。
2) 道路（主要道路）や鉄道などを地図に書き込む。
3) 地域の人的・物的防災資源を書き込む。（官公署、防災に役立つ施設、危険な施設、大型・集合施設、など）

３．昔の地図と比較（１０分）
　国土地理院発行の昔の地図と比較して、過去の土地利用と現在の土地利用がどのように異なるのか、学校や学校周辺がどのような場所だったのかについて、グループで討議する。

４．豪雨に対する危険性（１０分）
　洪水ハザードマップや土砂災害ハザードマップを参考に、豪雨に対する地域の危険性（どこでどういった危険が起こりうるか？）について討議して下さい。必要に応じて、ハザードマップの内容を地図に書き込んでもらっても結構です。

５．地震に対する危険性（１０分）
　東海地震と東南海地震が連動し、山梨県内の大部分が震度６強～震度７に襲われるという想定で、地震に対する地域の危険性について討議して下さい。

６．富士山周辺で群発地震が多発し、富士山噴火の危険が高まるという想定で、富士山噴火に対する地域の危険性について討議してください。（１０分）

７．発表資料の作成
　発表様式（別紙）に従って、模造紙にグループ討議の結果をまとめてください。

（３）平成２５年度に本県が実施した「防災教室講習会」でのＤＩＧの流れ（参考）

１．　自己紹介等を行う
　1)自己紹介（名前・所属校・職名）
　2)住んでいる場所と所属校までのおよその距離、通勤方法、通勤時間
　3)本日の防災教室講習会に期待すること
２．防災マップを作成する（３０分）
　1) 自然条件（河川、用水路、湖、ため池など）を地図に色を塗る。
　2) 道路（主要道路）や鉄道などを地図に書き込む。
　3) 地域の人的・物的防災資源を書き込む。（官公署、防災に役立つ施設、危険な施設、大型・集合施設、など）
３．地震に対する地域の特色をあげ、模造紙にまとめる（２５分）
　作成した防災マップを利用して、プラスにはたらく要因を青色の付箋紙、マイナスにはたらく要因をピンク色の付箋紙に書き込み、模造紙にまとめる。（付箋１枚につき、１つの内容を記入する）
４．下校中に大規模な地震が発生した想定で協議を行う（２０分）
　児童生徒が学校から自宅に下校している時に、震度６～７の地震が発生し、大規模な災害が発生したという想定で、どのようなことが考えられるか協議する。「考えられる現象」「児童生徒の行動」「教師の行動」について、それぞれプラスにはたらく要因を青色の付箋紙、マイナスにはたらく要因をピンク色の付箋紙に書き込み、模造紙にまとめる。
５．重要課題と解決策の検討（１０分）
　グループごとの協議で話し合われた中から重要課題を一つ取りあげ、その解決策を検討し、模造紙に書き込む。
６．ＤＩＧを通して気付いたことをまとめる（１０分）
　プラスにはたらく要因を青色の付箋紙、マイナスにはたらく要因をピンク色の付箋紙に具体的に書き込み、模造紙にまとめる。
７．発表
　模造紙にまとめた資料を発表する。
８．質疑応答
９．アンケート用紙への記入（振り返りを含む）

（４）平成２５年度に本県が実施した「防災教室講習会」まとめ（参考）

（１）良かった点

○　ＤＩＧ（災害図上訓練）に関すること

・近くの学校とＤＩＧをしたことにより、学校内の対策だけでなく横のつながりや地域との関わりの必要性を学ぶことができた。

・地域の特徴が地図を使うことで捉えやすく、すぐれた手法だと感じた。具体的には、「民家の多さ」「商店の少なさ」「中央道の危険性」「水の確保の難しさ」などのリスクを見つけることができた。

・東部地区交流で来ていて、この土地のことをあまり知らなかったので、とても勉強になった。普段から出かけるときに目でも確認することが必要だが、地図上でも危険を知ることが大切だと思った。

○　防災マニュアル等に関すること

・防災マニュアルが、本日のテーマのように「具体的な場面（下校）」を想定して作られていないことが分かった。

・登下校中に大きな地震が発生した場合、マニュアルどおりにいかないことが多い。至急、校内で（まにあえば夏季校内研で）特に下校中の発災時の対応について見直しをしたい。

○　今後の対応に関すること

・大規模な避難訓練は実施が難しくても、地図を用いれば行動が予測できることが分かった。

・早急に対処する必要性を感じた。様々な教育場面で思考力・判断力を高める学習の重要性を感じた。

・なんとなく不安に感じていた課題が、視点をもって確認できたように思う。課題の克服には、かなりの困難さもあるが、近日中にできそうなこともある。自校の防災マニュアルに反映させていきたい。

（２）改善した方がよいと思った点

○　事前学習に関すること

・学区の細かい資料（ブロック・石垣・消防水利などの施設・人材）が分からないので、ある程度調べて行った方がよい。

・「学区内の避難所の確認」「危険箇所の把握」など具体的なものをだしてあるとＤＩＧにいかせると思う。

○　地図に関すること

・地図に表記された内容が小さくて読み取りにくかった。もう少し拡大された地図がよい。

・白いドットシールは見えにくい。

・学区全体の地図が必要。

○　時間設定に関すること

・もう少し時間があると、さらに深まった討議ができると思う。作業時間がもう少し欲しい。

・内容が多く、設定された時間では十分な演習ができなかった。

○　協議に関すること

・地図の記入をどの程度、反映させるのか、その手法が不明確であった。

・指示が分かりにくかった。何をすればよいのか、どんな注意点があるのか、何を意図したものか分からず、的を射た話合いになるまで時間を無駄にした。

・具体的な良い例を最後に主催者側から示していただけると、今後の参考になると思う。

（３）感想、気付いたこと

・ＰＴＡ活動などにも取り入れていきたい。

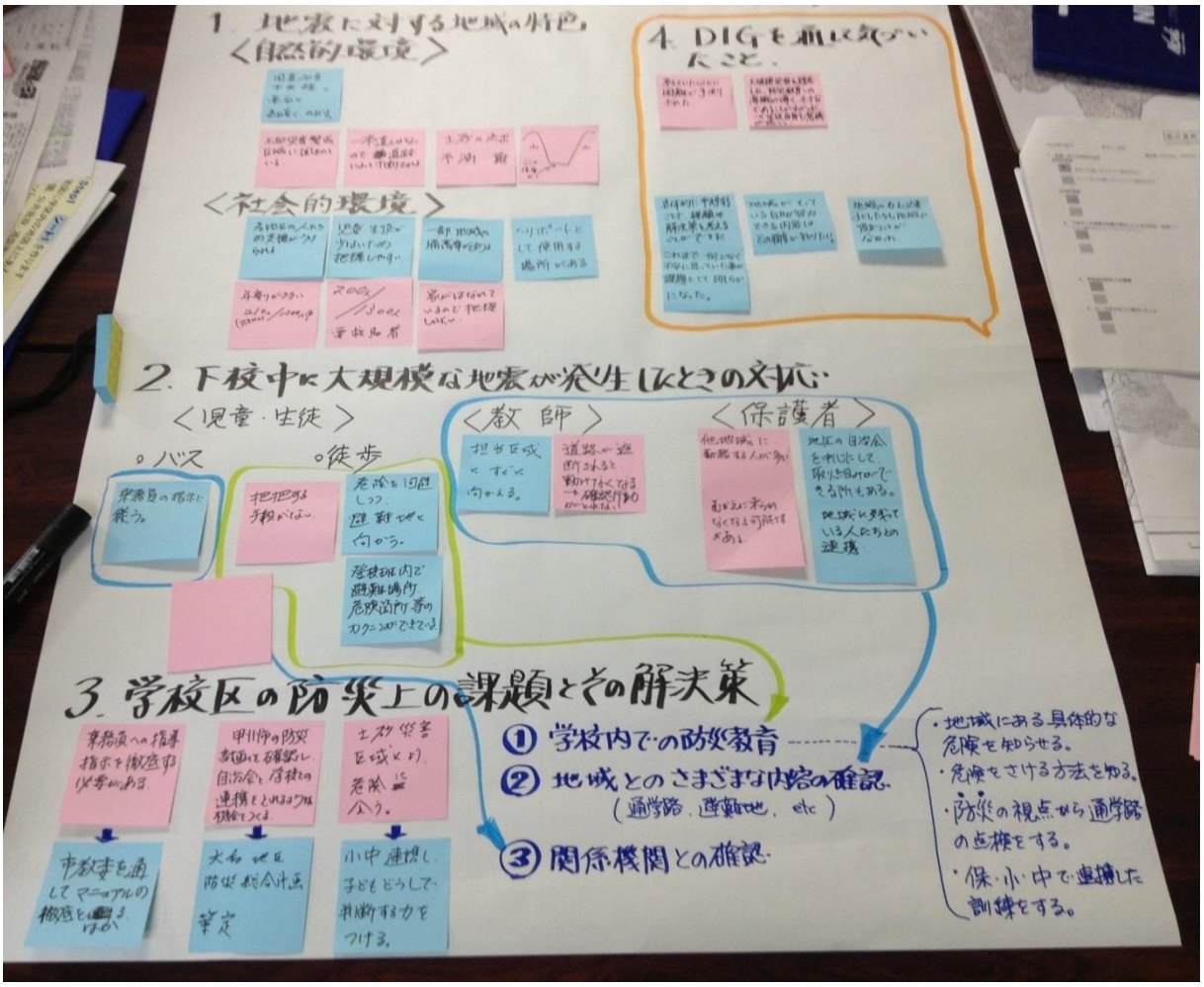
・対象やメンバーを教師のみではなく、他にも広げて様々な視点を入れたい。実際、自分たちのグループには男女共同参画推進委員の方がいたが、様々な視点を入れてくれた。

・父母、祖父母、地域の人、園児、児童生徒と教職員の共通理解が最も大事。単純記憶ではない状況判断をさせる力量をつけさせることが学校教育の目的とも考えるようになりました。

・私たちの班では、「子どもたちが自分たちで行動できるようにするためには？」という話がでた。「普段、できないことは、いざというときもできない」、そういった考えを十分に認識し、教育活動の中で確実に実施していかなければならない。

・児童が行う場合の留意点があれば教えていただきたい。

（５）参加者が作成した防災マップとまとめ（参考）



（６）白地図の作り方（参考）作業の進め方

① ヤフー等の検索の画面で、「４×３印刷」と入力する。または、http://latlonglab.yahoo.co.jp/4x3/ を入力し、４×３印刷の画面を表示します。

② 地図検索のバーに学校名等を入力し、印刷したい地域を表示させます。見えている画面をスクロールしても表示することは可能です。

③ 地図の上部にあるバー（地図・地下街・モノトーン・・・）の中の「モノトーン」をクリックして選択します。画面上の地図がモノトーンに変わります。

④ マップを拡大していき、最大の拡大から２番目、または３番目の拡大スケール（家の１軒１軒がはっきり分かる縮尺）にします。

⑤ 学校が地図の中心付近になるように設定します。

⑥ 画面の右側にある指示である「手順２」に沿って、横と縦の印刷する枚数（Ａ４）を指定します。
（横６枚・縦３枚の計１８枚、～　横７枚・縦３枚の計２１枚程度）
※必要に応じて、枚数を調整してください。

⑦ 画面の右側にある指示である「手順３」に沿って、印刷ページを表示します。
印刷範囲を調整したい場合は、⑤の手順で見えている地図の中心を変えると印刷範囲を調整することができます。印刷範囲がよろしければ、印刷します。

⑧ Ａ４で印刷されるので、必要な部分を切り取り、貼り合わせて完成させます。
※横７枚・縦３枚の計２１枚を貼り合わせると、横１００ｃｍ、縦７０ｃｍになります。

（７）関連文献（参考）

・災害図上訓練 DIG マニュアル第２ 版
60p、1999：DIG マニュアル作成委員会
平成 16 年８月１ 日初版　　平成 23 年２月１ 日改訂
岐阜県防災課　〒500-8570　岐阜市薮田南２－１－１
電話 058-272-1111(内線 2749)　FAX 058-271-4119
E-mai l c11115@pref.gifu.lg.jp

・市町村による図上型防災訓練の実施支援マニュアル
158p、2008：図上型防災訓練マニュアル研究会

・気象庁ワークショップ（経験したことのない大雨　その時どうする）
URL：https://www.jma.go.jp/jma/kishou/know/jma-ws/index.html

・チャレンジ！防災４８
256p：総務省消防庁

・山梨ｅＢＯＳＡＩのホームページ（http://www.ccn.yamanashi.ac.jp/~ebosai/）から、「災害図上訓練 DIG」（静岡県）の資料が閲覧できます。
こちらも参考にしてください。

・地域の防災力をアップする！
災害図上訓練ＤＩＧ「埼玉県地震基本編」テキスト
埼玉県危機管理防災部危機管理課

Ⅱ-1 緊急地震速報受信システムを活用した指導案例 【小学校】【中学校】【高等学校】【特別支援学校】

1　緊急地震速報受信システムを活用した指導案例 ①

（1）　**訓練内容**　帰りの会（SHR）に実施。事前に児童生徒等へも地震発生時の初期対応に限定した避難訓練を行うことを知らせた上で、地震発生時、どのような状況でも「上からものが落ちてこない」「横からものが倒れてこない」「ものが移動してこない」場所に素早く身を寄せて安全を確保することができるようにする訓練。

（2）　**ねらい**

①　地震発生時の初期対応について、児童生徒等が自ら判断し適切な行動を取ることができる。

（3）　**展 開**

指導事項	学習活動	指導上の留意点	備考
○訓練の概要と状況に応じた初期対応の確認	○事前に、訓練の概要や状況に応じた初期対応において基本となる行動（「落ちてこない」「倒れてこない」「移動してこない」場所に避難する）等について確認する。	○前日の帰りの会（SHR）等で確認しておく。	
【緊急地震速報】※帰りの会（ＳＨＲ）に「１０秒後に大規模な地震が発生する想定」で放送			
○地震発生時の基本行動 「落ちてこない」「倒れてこない」「移動してこない」場所に避難する。	○状況に応じて、自ら判断し適切な行動を取る。（例えば、以下のような行動） ①机が近くにある場合、最寄りの机の下に潜って机の脚をつかみ、揺れに備える。ヘルメットや防災頭巾をかぶるなど頭部に注意する。 ②机が近くにない場合、非構造部材や窓ガラス等の危険を避け、その場から離れて危険が小さい場所でひざまずき、頭部を保護し揺れに備える。 ○訓練終了。教室に入り自席につく。	○児童生徒等が置かれている状況を観察しておく。（写真や動画を撮る） ○児童生徒等が取った行動を把握しておく。 ○非構造部材が「落ちてこない」「倒れてこない」「移動してこない」場所に避難できない児童生徒等がいないか把握しておく。 ○危険な場所にいる仲間に声かけをしている児童生徒等がいたら把握しておく。 ○全員揃っているか確認する。	ビデオカメラなど 対応行動メモ
○状況に応じた初期対応	○それぞれのケースを振り返り、状況に応じた初期対応について「よかった点」「改善すべき点」を話し合う。 ○教師による講評を聞き、地震発生時の初期対応の在り方について考える。	○写真や動画、対応行動メモを基にいくつかのケースを取り上げるようにする。 ○児童生徒等の気づきを大切にし、自ら判断し行動できるようにする。 ○実態に応じて、適宜ペアやグループを取り入れてもよい。 ○実態に応じて、訓練時にいた場所に戻らせ、教師の合図で再度、初期対応の訓練を行ってもよい。	写真・映像・対応行動メモ

（4）　**評 価**

①　児童生徒等が地震発生時の状況に応じた適切な行動を取ることができたか。

２　緊急地震速報受信システムを活用した指導案例　②

（１）　**訓練内容**　清掃時（休み時間）に実施。管理職以外の教職員や児童生徒等には知らさずに実施。それぞれの場所でどう行動したらよいか、事前に確認したことの検証を行う訓練。

（２）　**ねらい**

①　児童生徒等が自ら判断し、その場に応じた避難行動（初期対応・二次対応）ができる。

（３）　**展 開**

指導事項	学習活動	指導上の留意点	備考
【緊急地震速報】※清掃時（休み時間）に「１０秒後に大規模な地震が発生する想定」で放送			
○清掃時（休み時間）に地震が起きた場合の行動 ○地震発生時の基本行動（初期対応） 「落ちてこない」「倒れてこない」「移動してこない」場所に避難する。	〔共通して〕 ○ものが「落ちてこない」「倒れてこない」「移動してこない」場所で身を守る姿勢をとる。 ○窓付近では、割れたガラスの飛散に備える。 ○火気等の危険物を処理する。 【教室・特別教室内】 ○最寄りの机の下に潜り、揺れに備える姿勢をとる。ヘルメットや防災頭巾をかぶり頭部を保護する。 ○近くに机がない場合、落下物等の危険が小さい場所でひざまずき、頭部を保護し揺れに備える。 【廊下・トイレ】 ○時間に余裕があると判断される場合は、近くの教室に入る。（教室と同様） ○教室に入る余裕がない時は、落下物等の危険が小さい場所でひざまずき、頭部を保護し揺れに備える。 【階段】 ○踊り場等に避難し、身をかがめ頭部を保護する。 ○下階の教室に避難し、近くの教室に入る。 【玄関・下駄箱】 ○時間に余裕があると判断される場合は、校庭など近くに建物が無い場所に移動する。 ○時間に余裕がない時は、下駄箱から離れ、落下物等の危険が小さい場所でひざまずき、頭部を保護し揺れに備える。 【体育館】 ○落下物等の危険が小さい場所でひざまずき、頭部を保護し揺れに備える。 【校庭】 ○できるだけ中央に行き、ひざまずき頭部を保護し、揺れに備える。	○児童生徒等の安全確保 ○出入り口の確保 ○初期対応で児童生徒等が取った行動を把握しておく。 ○非構造部材が「落ちてこない」「倒れてこない」「移動してこない」場所に児童生徒等が避難できているか把握しておく。 〔避難準備〕 ○状況に応じた適切な指示を出すようにする。	ビデオカメラなど 対応行動メモ 拡声器など
○適切な避難経路による避難行動（二次対応）	〔共通して〕 ○揺れがおさまったら、近くにいる教員の指示に従い避難する。 ○確認しておいた避難経路を基本としつつ、状況に応じた避難経路を考えて避難する。 ○近くに教員がいない場合は、非構造部材など落下物等の危険が小さい経路で避難する。 ○押し合わず静かに出る。 ○危険箇所には絶対に近寄らない。 ○避難場所に整列する。 ○人数の確認をする。 ○講評	〔避難開始〕 ○二次対応で児童生徒等が取った行動を把握しておく。 （参考）お　おさない か　かけない し　しゃべらない も　もどらない ち　ちかよらない ○状況に応じて必要な話をしたり、走ったりして避難することもある。 ○各階に児童生徒等が残っていないか確認する。	対応行動メモ

（４）　**評 価**

①　児童生徒等が自ら判断し、その場に応じた避難行動（初期対応・二次対応）ができたか。

3　緊急地震速報受信システムを活用した指導案例　③

（1）　**訓練内容**　放課後に実施。部活動等の活動中であったり既に下校していたりなど、様々な状況の児童生徒等がおり、安否確認が困難を要する状況に対する訓練。

（2）　**ねらい**

①　児童生徒等が自ら判断し、その場に応じた避難行動ができるとともに、確実な安否確認の重要性を知る。

（3）　**展 開**

指導事項	学習活動	指導上の留意点	備考
【緊急地震速報】※放課後に「１０秒後に大規模な地震が発生する想定」で放送			
○地震発生時の基本行動（初期対応） 「落ちてこない」「倒れてこない」「移動してこない」場所に避難する。	○ものが「落ちてこない」「倒れてこない」「移動してこない」場所で身を守る姿勢をとる。 ○窓付近では、割れたガラスの飛散に備える。 ○火気等の危険物を処理する。 ○出入り口に近い生徒のみ「避難経路の確保」	○児童生徒等の安全確保 ○出入り口の確保 ○初期対応で児童生徒等が取った行動を把握しておく。 ○非構造部材が「落ちてこない」「倒れてこない」「移動してこない」場所に児童生徒等が避難できているか把握しておく。	ビデオカメラなど 対応行動メモ
○適切な避難経路による避難行動（二次対応）	○揺れがおさまったら、非構造部材など落下物等の危険が小さい経路で避難する。 ○確認しておいた避難経路を基本としつつ、状況に応じた避難経路を考えて避難する。 ○押し合わず静かに移動する。 ○避難場所に活動グループごとに整列する。 ○人数の確認をする。	○周辺に逃げ遅れた児童生徒等がいないか確認しながら二次避難場所に避難誘導する。 ※放送機器が使用できない場合を想定して行うことも考えられる。 ○部活動等の活動をしているグループ単位で安否確認を行い、学級ごとに集計して安否確認ができていない児童生徒等を確認する。 ※学校で児童生徒等を待機させるための、食料、毛布等の保管場所、保管状況の確認、避難所運営に関わる準備、関係機関との連絡、通学路の被害状況の確認等の職員に関係する訓練を引き続き行うことも考えられる。	拡声器など 全校児童生徒等の安否確認とその報告及び集約
通学路の安全が確保されたことを確認し避難訓練の終了			
＜翌日＞ ○自分の命を守るために、主体的に行動できたか振り返らせる。	○各自の取った避難行動と、安否確認の方法について学級で発表し合い、各自の行動は安全が保たれていたか振り返る。	○自宅や帰宅途中だった場合の、安否確認の方法について確認する。	

（4）　**評 価**

①　児童生徒等が自ら判断し、その場に応じた避難行動ができたか。

②　児童生徒等が、確実な安否確認の重要性を知ることができたか。

（5）　**注意事項**

①　全校児童生徒等が揃わない状況での訓練は、全校生徒が緊急地震速報報を用いた訓練を経験した上で行うことが望ましい。また、帰宅した生徒の安否確認も行う場合は、事前に保護者へ周知をするとともに、理解と協力を得る必要がある。

1　【幼稚園】避難訓練における指導案例

（1）想 定　　室内での一斉活動中に起きた地震「震度５強」

（2）ねらい　①　地震発生時の行動の仕方を知る。
②　教師の指示や放送に従い、静かにすばやく行動する。

（3）展 開

過 程	教 師 の 活 動	幼 児 の 活 動	指 導 上 の 留 意 点
第一次避難	◇各クラスに子どもたちを集めて人員確認、落ち着いて座らせる。 ≪放 送≫ ・地震発生を想定した訓練を行うことや教師の指示をよく聞くことなどを知らせる。 「防災頭巾をかぶります。」 「机の下にもぐりなさい。」 ≪避難口の確保≫ ◇出入口の戸を開ける。 ◇安全を確認し園庭に避難する。 「上ばきのまま先生の後ろについてきなさい。」 （防災袋、ヘルメット、笛、名簿、クラス旗など）	○席について静かに待つ。 ○放送を聞く。 ○防災頭巾をかぶる。 ○机の下にもぐり次の指示を待つ。 ○教師の誘導に従って、上履きのまま外へ出る。 ○「おかしもち」の約束を守る。 ・おさない ・かけない ・しゃべらない ・もどらない ・ちかよらない	・避難訓練が始まることを認識させ、放送に注意を向けさせる。 ・静かに放送を聞き、次の行動に移れるように集中させる。 ・速やかに、正しくかぶれるように指示し、子どもの状態に応じて援助する。 ・一人一人の様子に気を配りながら言葉をかけ、落ち着けるようにする。 ・教師の声に意識を向けさせ、「おかしも」の約束を確認する。 ・あわてず、速やかに避難できるようにはっきりと指示を出し、避難経路に従って誘導する。 ・年少児は、誘導ひもを利用するなど確実に避難できる方法を検討し、訓練しておく。 （所要時間・方法などの年齢による違いを確認しておく。） ・泣いたり、極度に緊張している子どもは手を引いたり、抱き上げたりして避難させる。
第二次避難	◇安全な場所に誘導し、整列させる。「並びなさい。」 ◇人員確認 「そこにしゃがみます。静かにしなさい。」 ≪本部報告≫ 人員報告、異常の有無 安全確認	○教師の指示に従い整列する。 ○その場にしゃがんで静かに待つ。	・災害時でも比較的安全と思われる集合場所を定め、そこに無理のない範囲で整列させ、人員確認を行う。 ・本部からの指示があるまでその場に待機させ、さわいだりふざけたりせずに落ち着いて待てるようにする。 ・クラスの人数を把握し、本部に報告する。（組名、在籍数、欠席数、現在数、異常の有無）
	◆　本部からの指示 ・次の行動について ・異常にともなう教師の分担の変更についてなど	○訓練について、園長などの話を聞く。	・残留児の確認や、負傷児への手当などを予測し、教師間で連携をとりながら行動する。 ・各園の状況に応じて、近くの学校や広域避難場所などへの第三次避難を行うことについても検討しておく。
事後	◇各保育室に戻る。	○クラスごとに教師の話を聞く。	・よかった点をほめ、教師の感想や注意を伝えながら次回に備える。

（4）　実際の指導にあたって

①　訓練の場では、教師ははっきりと、より具体的な言葉がけをするようにし、その言葉がけに応じた行動の仕方を繰り返し練習していくようにする。

②　年少児の中には防災頭巾に抵抗感を示す子どもも見られるが、いやがらずに自分でかぶる練習から始め、しだいに正しく、すばやくかぶれるように繰り返し指導していく。

③　極度に緊張したり、泣いたりする子どもについては、教師がそばに行きスキンシップをとったり、安心できるような言葉がけをしたりする中で、徐々に落ち着いて取り組めるようにしていく。

④教職員は、その場の状況に応じて幼児の安全確保・誘導の仕方など自分の役割を各自が判断・理解して動く。

【防災学習教材（例）】

＊紙芝居　・じしんだ！　そのとき どうする？　全６巻（学習研究社）
・だいちゃんのおかしなひなんくんれん（童心社）

＊絵本　・ゆずちやん（ポプラ社）
・ふうちゃんとじしんかいじゅう（小さな出会いの家）

＊ゲーム等　・「ぼうさいダック」（（社）日本損害保険協会）

Ⅳ-1 校種別・領域別指導案例　【小学校】

１　【小学校】生活科における指導案例　（１学年）

（1）　題 材 「　がっこう　だいすき　　」

（2）　題材設定の理由

小学校へ入学して、保護者と生活を共にしない時間が徐々に増えていく。小学校低学年の児童にとって防災教育は欠かせない。生活科の体験活動を通して防災を学び、児童に実践的な知識や防災に対する意識を持たせたい。

（3）　単元のねらい

・学校探検において校舎内や校庭を歩き、学校の中の施設、設備、人々に興味・関心をもつことができる。
・学校探検で見付けたことや学んだことを適切に表現して伝えることができる。

（4）　展 開（3 時間）

過程	○学習活動　・内容	指導上の留意点	備考
導入	○　前時の学校の校舎内を探検して、発見したことを発表する。 ・学校の中でいったことのある場所の確認 ・幼稚園や保育所等と似ている場所、もの ・小学校で初めて見た場所、もの ・もっと詳しく知りたい場所、もの	・友達の発表を聞き、発表の中に出てきた場所やもののイメージや興味が湧きやすいよう、自由に質問や意見を出し合える雰囲気をつくる。 ・地震や火事、災害に関する場所やものについて発表した子どものものを取り上げ、全体に意識づける。	・発表するためのもの（探検カード等）
展開	○　発表された場所やものについて話し合う。 ・もう一度見たい場所、ものについて意見を出し合う。 ・もう一度探検に行く計画を立てる。 ○　もう一度探検に行く。 ・各自が選んだ場所、ものを見に行き、確認する。	・お互いに見付けたことを聞き合うことで、自分が気付かなかったことに気付き、次の活動への意欲につなげさせる。 ・防災に関する場所やものについては全員で確認する。 ・探検から帰ってきたら、すぐにワークシートへまとめる。	・探検カード
まとめ	○　分かったことを発表し合い、黒板へまとめる。 ・学習に使う場所、もの ・遊ぶ場所、もの ・自分たちの身を守る場所、もの についてまとめていく。	・自分たちの身の回りには、学校生活を守る場所、ものがあることに気付く。 ・自分たちの身を守るものについては、教師が補足をする。	

（5）　評 価

・学校探検において校舎内や校庭を歩き、学校の中の施設、設備、人々に興味・関心をもっている。
・学校探検で見付けたことや学んだことを適切に表現して伝えている。

２　【小学校】道徳科における指導案例（高学年）

（１）　**主題名**　「自分にできることを」　学習指導要領Ｃ－（１４）勤労・公共の精神

（２）　**教材名**　「助け合って生きる　～阪神・淡路大震災の被災地で～」
（出典：文部省 道徳教育推進指導資料「社会のルールを大切にする心を育てる」）

（３）　**主題設定の理由**

私たちが生きる社会は、人々が働き、互いに支え合うことによって成り立っている。お互いが力を合わせ、助け合ってこそ、よりよい社会の実現につながっていく。

しかし、物質的にも豊かで、不自由することの少ない日常生活のなかで、このことを意識したり、実感したりする場面は少ない。

そこで、働くことは自分のためだけではなく社会生活を支えるものであることや、働くことから得られる喜びについて考えることをとおして、進んで社会に奉仕し、公共のために役に立とうとする心を育もうと考え本主題を設定した。

（４）　**ねらい**

登場人物の心情を考えたり、外部講師の話を聴いたりする学習を通して、社会は人々が支え合うことによって成り立っていることを知り、進んで公共のために役に立とうとする態度を育む。

（５）　**展　開**

過程	学習活動と主な発問	予想される児童の反応	指導上の工夫・留意点
導入	１　ボランティア活動をしている場面の写真をみて、感じたことを発表する。	・私もやったことある。 ・私にはできないかも。 ・どんな気持ちでやっているのかな。	・本時の道徳的価値についてふれ、学習の見通しをもたせる。
展開	２　教材「助け合って生きる」を読んで、考える。 ○余震が続く神戸に父が行くことを知り、正夫はどんなことを考えたか。	・なぜ、そんな大変なところへ行くのか。 ・遠くに住んでいるお父さんが行かなくてもいいのではないか。 ・お父さんのことが心配。	・父親を心配する思いのみならず、人ごとである正夫の心情に気付かせる（人間理解）。
	○父から被災地の様子を聞いた正夫が申し訳ない気持ちになったのはなぜか。	・自分には関係のないことだと考えていたことに気付いたから。 ・自分はなにもしていないから。	・正夫の心情の変化に気付かせる。
	○正夫のお父さんやボランテイア活動をしている人たちを突き動かしているのは、どのような思いか。 ◎私たちも、これまでに似たような思いを抱いたことはなかったか。また、そう思ったときに、実際に行動できるためには、どのように考える必要があるか。【中心発問】	・なんとか命を救いたい。 ・人の役に立ちたい。 ・自分の家族が困っていると思えば行動できる。 ・自分が困ったときのことを思い出せば助けてあげられる。	・活動の根底にある思いを考えさせる。 ・行動の原動力となる思いについて考え、自分なりの考え方を見いだせるようにする。
	３　ボランティア活動を行った人の話を聞く。		
終末	４　感想を書く。	・本時の学習全体をとおして感じたことや考えたことを書く。	

（６）　**評　価**

・時間の経過とともに変化する登場人物の心情を考えているか。（多面的・多角的な見方）
・公共のために役に立つということについて、自分の生活を見つめ、振り返りながら考えているか。（自分自身との関わり）

3 【小学校】社会科における指導案例 （４学年）

（1） 題 材 「自然災害から人々を守る活動－土砂災害にそなえるまちづくり－」

（2） 題材設定の理由

過去に起こった自然災害について考えことを通して、災害に対する行政機関等の連携の様子、今後発生が予想される災害に対する備えを理解できるようにしたい。また、学習を通して児童自身が自分にできることを考えることも併せて目指したい。

（3） ねらい

・自然災害から人々を守る活動について、過去に発生した自然災害を地図や年表などの資料で調べたり、関係機関の働きなどを聞き取り調査したりしてまとめ、自然災害の被害状況と人々を守る活動を関連付けて考え、行政機関等の人々が、自然災害に対して様々な協力をして対処してきたことや、今後発生が予想される自然災害に対して、様々な備えをしていることを理解できるようにする。
・自然災害から人々を守る活動について、学習問題や学習課題を主体的に追究し、県民としてできることを実践しようとしている。

（4） 展 開

過程	○学習活動・内容	指導上の留意点	備考
導入	○ 県や市がこれまで自然災害に対してどのように対処してきたのかを整理する。 ・県や市、国（自衛隊）が連携して人々の命や生活を守る取り組みをしてきた。 ・自然災害が繰り返されないよう、道路や河川の整備を行ってきた。	・前時までの学習内容を想起できるように、災害年表や地図を示すようにする。 ・自然災害への備えの必要性を捉えられるように、近年発生した自然災害の様子を示すなど、これからも自然災害が発生する可能性があることを考えられるようにする。	・災害年表 ・災害が発生したところを示した地図
展開	【学習課題】 山梨県や○○市では、自然災害に対してどのような備えをしているのだろう。		
	○ 県や市でどのような備えをしているのかを調べる。 ・県や市で作成した防災（ハザード）マップ ・防災倉庫や水防倉庫の整備 ・避難訓練の実施 ・防災メール	・調べたことや施設などを、前時までの学習で用いた地図に示し、広範囲に被害が及ぶ可能性がある自然災害に対しては、その備えも広範囲にわたることを考えられるようにする。 ・調べたことについて県、市のどちらが主に行っているものかを示すようにすることで、互いの連携の様子を捉えられるようにする。	・防災マップ ・様々な施設の写真
	○ 市役所の防災担当の方のお話を聞く。 ・自然災害に関する様々な情報を発信している。 ・市は、地域住民と協力して自然災害に対処できるように備えをしている。 ・大きな自然災害に対しては、県や国（自衛隊）と連携できるようなしくみを整えている。		
	○ 調べたことを基にして、関係図をまとめる。	・前時までの学習内容や、本時において調べたことを基に関係図に整理するよう伝える。	・ワークシート（関係図）
まとめ	○ 学習課題に対する考えをまとめる。 【まとめの例】 山梨県や○○市では、これまで様々な自然災害が発生してきた。そのため、県や市では日常的に人々に対して防災に関する情報を発信するとともに、自然災害が発生した際には、県、市、国が連携して対処できるしくみを整えるなど、今後発生が予想される自然災害に対して様々な備えをしている。	・調べたことや整理した関係図などの中でまとめのポイントになる用語や内容を示すなど、文章によるまとめを行いやすいようにする。	

（5） 評 価

・自然災害に対する県や市の備えについて、具体的に調べている。
・調べたことを基にして関係図を整理したり、学習課題のまとめを行ったりしている。

4 【小学校】理科における指導案例 （５学年）

（1） 題 材 「流れる水の働きと土地の変化」

（2） 題材設定の理由

日本の河川は急勾配で短いという特徴があり、大雨の時には洪水などの水害が起こりやすい。近年は台風の規模や降雨の様子などが変化し、毎年のように水害が発生しており、河川の特徴や災害に対する基本的な知識を身に付けることが望まれる。小学校理科の学習指導要領解説には、「天気、川、土地などの指導に当たっては、災害に関連する基礎的な理解が図られるようにすること」と記載されており、これに関連する内容として、４年では雨水の行方と地面の様子、５年では流れる水の働きと土地の変化、天気の変化、６年では土地の作りと変化が挙げられる。

自然災害は水害だけではないが、まずは流れる水の働きについて体験的に学習することを通し、土地が変化することに対して理解を深めたい。さらに、他の内容や児童が暮らす身近な地域とも関連付け、自分の住んでいる地域で起こりうる様々な災害に目を向けられるようにし、防災に対する意識を高めたいと考える。

（3） ねらい

① 身近な河川と流れる水の働きとを関係付けて考察し、土地の変化の様子について自分の考えを表現している。

② 被害を軽減するための対策を流れる水の働きと関連付けて考え、河川における災害対策の仕組みを見いだすことができる。

（4） 展 開

過程	学習活動・内容	教師の支援	備 考
導入	1 身近な河川の、過去の増水による被害の様子を知る。	・増水による水害への関心を高めるようにする。	水害の画像資料 新聞記事
展開	2 身近な河川が増水した時の危険箇所を考える。 ・流れる水の働きと関連付け、増水時の危険箇所を考える。	・既習事項を生かし、浸食されそうな箇所、流されたものが堆積しそうな箇所、水量が増える河川の合流地点等に気付くようにする。	最近の河川の画像資料 ※全体が見渡せる航空写真を利用
	3 河川が増水したときの被害を減らす対策を考える。 ・考えた危険箇所において起こると考えられる被害と流れる水の働きを関連付けて、対策を考える。	・社会での自然災害に関する学習内容を想起させ、「侵食されないようにするには」「水の勢いを弱めるには」等の視点を持てるようにする。	
	4 実際に行われている対策を知る。 ・堤防、川幅の拡張等の対策を、目的（水の流れを弱める、増水に備える等）と照らし合わせる。 ・どのように土地が変化したか、過去の様子と現在の様子を比較する。	・他の河川で行われている対策も、必要に応じて取り上げる。 ・資料を示し、河川の形や川はばが変化している様子に気付くようにする。	過去の河川の画像資料 ※全体が見渡せる航空写真を利用
まとめ	5 自分が住んでいる地域において起こると予想される水害について考える。	・児童自身が意欲的に防災について考えるきっかけとする。	ハザードマップ

５　【小学校】家庭科における指導案例

（1）　題 材　「整理・整頓で安全・快適な生活」～整理・整頓は何のため？～
（＊「内容Ｂ　衣食住の生活　住生活」の題材の中で扱う）

（2）　題材設定の理由

教室内におけるロッカーや机の中などの様子を見ると、児童は整理・整頓についてあまり関心は高くなく、物であふれ、自分の持ち物をしっかりと管理できていない様子が見受けられる。実際どうすることが整理・整頓なのか分かっていない様子もうかがえる。気持ちよく安全・快適に生活するために、住まいの整理・整頓が必要であることが分かり、既習事項や自分の生活経験と関連づけ、安全・快適等の視点から整理・整頓の仕方を考え、工夫できるようにしたい。また、他教科で行っている防災に関する授業と関連させ、日常の整理・整頓が防災につながっていることも意識させたい。

（3）　ねらい（本時）

①　整理・整頓の仕方について問題を見いだして課題を設定している。
②　住まいの整理・整頓の仕方について、課題の解決に向けて主体的に取り組もうとしている。

（4）　展 開（１時間目として扱う場合の例）

過程	学習活動・内容	教師の支援	備考
導入	・日常の教室の様子から気付くこと等を挙げる。	・教室の日常の様子や児童の発言から問題を見いだせるようにする。	教室の普段の様子がわかる写真等
展開	整理・整頓は何のためにするのだろう？ ○　子ども部屋の問題点や困ることについて考える。 ・個人で考える ・グループで意見交換をする ・グループごとに出た意見をクラスで共有する。 ○　大きな地震が起きた時の危険とその理由について考える。 ・グループで意見交換をし、全体で共有をする。 ○　本題材の課題を設定する。	・写真（イラスト）をもとに、自分の経験とつなげて考えられるようにする。 ・理由とともに考えさせる。 ・安全の視点や快適の視点など視点ごとにまとめる。 ・子ども部屋に大きな地震が来たらどうなるか、安全の視点からもう一度考えさせる。 ・児童の発言等から課題を設定できるようにする。	子ども部屋の写真またはイラスト（出入り口が物で塞がれている、部屋全体が雑然としている、コードが床をはっている等が写っているもの） ・ワークシート
まとめ	○　本時のまとめをし、題材の流れの確認をする。 ・振り返りを記入する ・次時までの課題を確認する	・整理・整頓についてまとめる。 ・本題材の流れを確認する。 ・次時は整理・整頓の仕方について学ぶことを確認し、家庭での仕方や工夫を調べてくるように伝える。	・振り返りシート

６　【小学校】学級活動における指導案例　①（低学年４月）

（1）　題 材　「授業中に地震が起きたらどうしたらよいか」学級活動（２）―ウ

（2）　題材設定の理由

入学して間もない１年生と１年が経過しているとはいえ、まだ完全に学校に慣れているとはいえない２年生においては、しっかりとした学習をしていないと、大地震が起きた場合に大混乱になり、事故が多発することが予想される。そこで、大地震に際して、一人ひとりの児童がどのように行動したらよいかを理解させ、混乱を防ぎ、生命身体を守る方法を身につけさせたい。

（3）　ねらい

①　地震が起きたら、教職員の指示に従って、安全に避難できるようにする。

（4）　展 開

指導事項	学習活動	指導上の留意点	備考
○地震の被害の様子 ○授業中に地震が起きた場合の行動	○今まで経験した地震について話し合う。 ○地震の被害のビデオを視聴する。 ○授業中に地震が起きたときどうしたらよいか話し合う。	○びっくりしたこと、困ったことを板書する。 ○１年生の経験を通して言えるようにする。	地震の被害ビデオ
	○それぞれの行動の理由を話し合う。 ①机の下に潜り頭をかくす。 ②机の脚をつかまえる。 ③口を閉じ、教師の指示に従う。 ④防災ずきん等をかぶる。 ⑤教職員の後について出る。 ⑥押し合わないで静かに出る。 ⑦避難経路を通って避難する。 ⑧避難場所に整列する。 ⑨人数の確認をする。	○板書してまとめる。	
			訓練評価表
○大地震の時の基本行動	○基本となる行動や態度について話し合う。	○慌てない。 ○指示に従う。 ○外に飛び出さない。 ○落下物に注意する。 ○話をしない。	
○地震を想定しての練習	○話し合ったことをもとに、地震を想定して練習を行う。		
○練習の振り返り	○練習して良かったことや、改善点を出し合い、実際に地震が起きた時にどのようなことに気を付けて行動するか決める。	○一人ひとりの児童の意思決定を促す。	

7 【小学校】学級活動における指導案例 ②（高学年２月）

（1） 題 材 「地震の強さ」 学級活動（２）―ウ

（2） 題材設定の理由

阪神・淡路大震災、新潟県中越大震災そして、記憶に新しい東日本大震災や熊本地震を通して、大地震やその防災についての社会的関心が高まっている。テレビ、ラジオなどの地震についての報道も、充実してきた観測体制を反映して、緊急地震速報による呼びかけや地震発生直後に速報が報道されるようになってきた。この速報などで使用される震度階級も、身近なものになりつつあるとはいうものの、その詳細については、理解しているとは言いがたいようである。そこで、２０１１年３月の「東日本大震災」での家屋倒壊による災害の様子や津波による避難の状況などをもとに、山梨県で甚大な被害が予想される南海トラフ地震や県内の断層での直下型地震が、どのような強さのものが予想されており、震度階級はどう分けられているか、そして災害が起きたときにどのような対応を取ったらよいかなどを理解させたい。

（3） ねらい

① 地震の強さは、揺れ方や被害の程度により階級に分けられていることを知る。

（4） 展 開

指導事項	学習活動	指導上の留意点	備考
○地震の被害の様子から、地震が怖いものであることの理解	○いままで経験した地震について話し合う。 ○地震の被害のビデオを視聴して、被害の様子と震度を理解する。 ○地震災害を経験した児童の作文から、揺れや被害の様子、精神的打撃の様子を読み取る。	○ビデオ視聴で怖かったことなど感想を話し合う。 ○震災を体験した児童の作文から、被害の様子や揺れの様子、精神的打撃などがどんなにすごいものであったかを理解させる。	地震の被害ビデオ
○震度階級の理解 ○震度階級表を仕上げる	○0～7 の 10 階級であることを知る。 ○震度階級の揺れや被害の様子を、下から階級別に並べて予想する。 ○震度階級表をつくる。 ・震度 0～7 までの 10 階級の「被害カード」を順に並べる。（被害カードで示すもの以外は、震度階級表の中に記載しておく。） ・正しく並べられたか確かめる。 ・糊付けして仕上げる。	○0～7 の 10 階級に分かれていることを教える。 ○震度階級台紙と「被害カード」（１０枚程度）を配布し、対応させる。 ○「被害カード」を台紙の上に並べさせ糊付けさせる。	気象庁の示す「気象庁震度階級関連解説表」をもとに“人の体感・行動”“屋内の状況”“屋外の状況”の３つから、各階級に示されているものをいくつか取り上げ、「被害カード」として示す。
○利用法の理解	○震度階級表の利用の仕方について話し合う。 ○南海トラフ地震は、甲府で震度 6～7 が予想されることを知る。 ○家の見やすいところに掲示し、地震やニュースの速報などを表に当てはめてみる。	○東日本大震災は、多くの地域で震度 6 弱から 7 であったことを理解する。 ○地震の震度の実際に関心をもたせる。 ○マグニチュード（M）が地震の大きさを表すことにもふれる。地震が発するエネルギーの大きさを表した指標値であり、マグニチュードが２増えるとエネルギーは 1000 倍になるなどに触れる。	○マグニチュードについては深入りしない。
○自助・共助・公助についての理解	○震災の被害を最小限に抑えるためには、自助・共助・公助それぞれが、災害対応力を高め、連携することが大切であることを知る。 ○実際に地震が起きたとき、どのように対応したらよいか、自分の考えを書くようにする。 ○自分を中心に考えると、震災の直後、自分を守るのは、自助の力である。 自分ひとりでは対応できない状況になったとき、頼ることができるのは、共助である。それは同時に、自分が可能ならば共助に参加する意識が前提となることを教師の説話を通して知る。	○自助「自らの安全は、自らが守る」という防災の基本、共助「わがまちは、わが手で守る」という地域を守ることは自分を守ること、そして公助「様々な行政機関の応急対策活動」の考えについて、教師の指導により知る。	○ワークシートの活用
○自助・共助にかかわる意思決定	○これまでの学びをもとに、災害が発生した時、自助・共助の観点から、自分には何ができるか考え、実践に移すことを決める。	○一人ひとりの児童の意思決定を促す	

（5） 事後指導

① 地震の怖さが分かり、南海トラフ地震、直下型地震に対して関心を寄せるようにする。
② 震度階級表を掲示し利用するように話題を出す。
③ 地震について自主的に調べるようにさせる。

８　【小学校】学級活動における指導案例　③（高学年 保健教育）

（1）　題 材　「大きな災害の後で（心のケア）」 学級活動（２）ーウ　心身ともに健康で安全な生活態度の育成

（2）　題材設定の理由

災害時などにおける子どもの心のケアを適切に行うためには、平時からの取り組みが基盤である。子どもの心のケアを適切に行うためには、災害時のみならず、平時からの心の健康に関する指導を、教育活動全体を通じて、計画的に実施しておくことが重要である。

本題材で使用する資料は、文部科学省が作成した心の健康に関する指導参考資料である。

『文部科学省防災教育教材　災害から命を守るために』Ｈ２０．３　教材№.１０８

（3）　ねらい

①　突然の災害があったとき、心や体にどんな変化が起こりやすいか理解できるようにする。

②　心が傷ついたりしたとき、どのように対処したらよいか理解を深め、生活に生かせるようにする。

（4）　展 開

指導事項	学習活動	指導上の留意点	備考
	スライド開始		スライドは、『文部科学省防災教育教材ＤＶＤ災害から命を守るために』H20.3 教材№.108 を活用
○大きな災害後に起こる問題の理解	○スライドを手がかりに、大きな災害の後の心や体の変化について話し合う。	○本日の学習の見通しをもたせ、途中、気分が悪くなったりした場合は、申し出るよう伝える。	
	スライド１－１を提示		
○災害の経験、見聞きすることで、心や体に変化が起こることの理解	○心や体に変化が起こりやすくなるような出来事にはどんなことがあるか考える。 （例えば、災害では･･･。それ以外では、･･･。） ・地震等の災害で家が壊れる。 ・近所で火事があった。 ・大事な人を亡くした　等	○スライドの絵を見せて、心や体に変化が起こりやすくなるような災害やそれに伴う出来事はどのようなことがあるか考えさせる。	ワークシートの活用
	スライド１－２を提示		
○心や体の変化は、災害の体験以外でも起こることを理解	○災害の後に起こる心や体の変化について考えるとともに、恐ろしい体験等をした後、心や体に変化が起こりやすくなることは、自然なことであることを理解する。	○実際に体験したことだけでなく、目撃することでも心が傷つくことがあることを具体的に説明する。	災害や事件・事故などを経験した子どもの状況に応じて指導していくことが必要である。養護教諭やスクールカウンセラーなどと協力して、子どもの様子に配慮しながら進める。
	スライド２－１・２－２		
○心が傷ついて起こる心や体の変化の理解	○災害で怖い体験をした後で、起こりやすい心や体の変化には、どのようなことがあるか知る。	○誰にでも起こることであり、同じ経験でも一人ひとり傷つき方が違うことにも触れる。 ・災害の時の様子を遊びで繰り返す ・怖かった時のことやそのときの気持が思い出せない ・いらいらする　等	
	スライド３～５を提示		
○対処方法の理解	○スライドの絵を見せて、心や体に変化が起こりやすくなるような災害やそれに伴う出来事はどのようなことがあるかグループで考える。 ・どんな対処方法があるか。 ・相談する方法は？ ・自分にあっていると思う方法など ○グループの話合いの結果を発表する。 ○意見をもとに自分にあった方法を考える。	○意見に出なかった対処方法については紹介をする。 （対処例）　体を動かす、お手伝いをする、歌を歌う、音楽をきく、安心できる人と過ごす時間を多くする等 ○普段の生活でも活用できることを説明する。	本例は、２単位時間で学習することを想定しているが、１単位時間で学習する場合は、グループでの話合いを省略する。
	スライド６を提示		
○災害にあった人への配慮点を理解	○災害にあった人に対して、自分（子ども）ができる支援の方法や留意点について、話し合い、意見を発表する。 ○自分が特に留意することについて考え、実践することを決める。	○具体的な留意点を説明する。 ・がんばれ、元気を出せ、くよくよするな、などの言葉は使わない。 ・大変な思いをしていることを理解する ・ゆっくり見守ることが大切である等 ○一人ひとりの児童の意思決定を促す。	

９ 【小学校】避難訓練における指導案例 ①（全学年）

（1） 想 定 「授業中の避難訓練（震度５強）」 学校行事（３）健康安全・体育的行事

（2） ねらい

① 地震発生時の基本行動を理解させ、それに対処する態度を養う。
② 地震発生時は、いろいろな指示をしっかり聞き、行動できるように練習させる。
③ 安全に特に気を配らせる。

（3） 展 開

過程	指導内容及び実施方法		児童の活動	準備
事前	○地震の揺れやそれに伴って発生しやすい火災の怖さや、その場面に対処する方法について話し合う。 ○日常気を付けておかなければならないことを知らせる。 （避難経路、安全な避難場所について確認させておく。）		○地震による被害の様子が分かり、どのように対処したらよいかが分かる。 ○普段火気に気を付けなければならないことがわかり、避難経路や安全な避難場所が分かる。	校内教室配置図
訓練	係	担任		
	○予定開始時間 訓練開始の放送	○児童に話をさせずに指示を聞かせる。	○放送を静かに聞く。	想定した避難訓練の放送原稿
	①想定した震度の地震が発生したことを知らせる。（「訓練、訓練」と２度予告する。）	①放送を受け、直ちに机の下に潜り、机の脚をしっかり持つことを指示する。（出入り口の開放）	○担任の指示に従い、机の下に潜り、机の脚をしっかり持つ。	
	②地震の揺れがおさまったことを知らせ、避難開始を告げる。	②以下のことを指示する。 ・学用品を持たない。 ・防災頭巾をかぶる。 ・上履きのままでよい。	○担任の指示をしっかり聞く。 ○落ちついて行動する。 ○話をしない。	
	③災害対策本部の旗を持ち、避難場所に移動する。	③防災袋（出席簿等）を持つ。		災害対策本部の旗
	④避難の様子を観察し、講評の時、気がついたことを指導する。	④避難開始指示	○安全に気を付ける。 ○前の人を押さない。	
	⑤報告を受け、避難完了の時刻を確認する。 （避難時間○分）	⑤避難場所まで引率→集合→児童確認→本部へ報告	○避難場所に集合する。 ○話をしない。 ○すばやく整列する。	
事後	○各係で、避難訓練について振り返る。 ・放送に頼らず、自分で判断ができたか。 ・児童の危険を想定できたか。 ・課題に自ら気付けたか。	○教室に戻り、避難行動について振り返る環境をつくる。 ・児童の行動を振り返らせる。 ・児童が気付かなかったことを指摘する。 ・日常生活での危険について考えさせる　など	○自分のとった行動を振り返る。 ・教師の指示の前に避難行動について考えたか ・避難中に危険を予測できたか ・命を守る上で気付いたことは何かなど	

※ここでの事例は、基本的な行動を示している。各学校の状況や震度によって、適切な行動ができる判断力をつけたい。
※児童の健康状態、精神状態を常に把握し、心のケアに配慮する。

１０　【小学校】避難訓練における指導案例 ②（全学年）

（1）　想 定　「業間休み時間中の避難訓練（震度５強）」 学校行事（３）健康安全・儀式的行事

（2）　ねらい

①　教師から離れている場合の地震に際して、児童自らが安全に正しく行動する方法を理解する。

②　地震発生の放送を聞き、その指示をしっかり聞いて、安全に避難できるようにする。

（3）　展 開

過 程	指導内容及び実施方法		児童の活動	準備
事前	○予告無しにくる地震に対処する行動を、屋内、屋外に分けて話し合い、日常の心構えを知らせる。		○屋内では、机の下に潜り机の脚をしっかり持つ。 ○屋外では、建物から離れ、座って揺れのおさまるのを待つ。	校内教室配置図 学校敷地図
訓練	係	担任・場所毎担当		想定した避難訓練の放送原稿
	○予定開始時間 訓練開始の放送 ①想定した震度の地震が発生したことを知らせる。（「訓練、訓練」と２度予告する。） ・教室内では近くの机の下に潜り、机の脚をしっかりもつよう放送で指示する。 ・廊下や階段にいる児童は、窓から離れ、座って揺れがおさまるのを待つように、放送で指示する。 ・屋外にいる児童には、建物から離れ、座って揺れのおさまるのを待つように、放送で指示する。	①担当ごとの役割分担 ○屋内班 ・火の始末をする。 ・出入口の開放をする。 ・机の下に潜り、机の脚をしっかりもつようにさせる。 ○屋外班 ・建物から離れて座ることを指示する。 ・外にいる子どもの様子を観察する。	○放送を静かに聞く。 ○教室内の児童は、近くの机の下に潜り、机の脚をしっかり持つ。 ○廊下や階段にいる児童は、窓から離れて座る。 ○トイレにいる児童は、急いで用をたし、トイレから出て、窓から離れて座る。	屋外を観察する教師と屋内を観察する教師を決めておく。 屋内を点検する教師を決めておき、トイレを含めて見回る。
	②地震の揺れがおさまったことを知らせ、避難開始を告げる。 屋内の児童には次のことを指示する。 ・学用品を持たない。 ・防災頭巾をかぶる。 ・上履きのままでよい。	②避難開始の指示をする。 ○屋内班 ・放送に従い外に出ることを指示する。 ・各階に残っている児童がいないか確認してから避難する。 ・防災袋を持つ。（校外班担当の防災袋を、担当階の責任者は持ち出す）	○放送を静かに聞き、校舎内の児童は手近の防災頭巾等をかぶり、上履きで避難する。校庭に出たら、避難場所に集合する。 ○屋外の児童は、避難場所に向かい、集合する。 ○クラスごとに整列し、静かに待つ。 ○必要以外の話をしない。	災害対策本部の旗
	③災害対策本部の旗を持ち避難場所に移動	○屋外班 ・校庭の整列位置に誘導する。 ・職員室の職員は、児童名簿を持つ。		
	④報告を受け、避難完了の時刻を確認する。（避難時間○分）	③クラスの掌握をして、全員避難の確認を行い、本部に報告する。		
事後	○各係で、避難訓練について振り返る。 ・児童が放送に頼らず、自分で判断ができたか。 ・教師が児童の危険を想定できたか。 ・課題に自ら気付けたか。	○教室に戻り、避難行動について振り返る環境をつくる。 ・児童の行動を振り返らせる ・児童が気付かなかったことを指摘する。 ・日常生活での危険について考えさせる　など	○自分のとった行動を振り返る。 ・先生の指示の前に避難行動について考えたか ・避難中に危険を予測できたか ・命を守る上で気付いたことは何か　など	

※ここでの事例は、基本的な行動を示している。各学校の状況や震度によって、適切な行動ができる判断力をつけたい。

※児童の健康状態、精神状態を常に把握し、心のケアに配慮する。

1　【小・中学校】総合的な学習の時間における指導案例

（1）　題材　「災害から考える」

（2）　題材設定の理由

学校生活・日常生活において、突然おそってくる災害にどのように対処すればよいのか、あらゆる場面を想定して児童・生徒とともに考え、最良の方法を見つけ出し、児童・生徒各自が主体的に対処できる態度・能力を養う。そのためにも災害について、全国各地で起こっている災害と山梨県で考え得る災害を把握することが肝要である。

（3）　ねらい

① いつ・どこでも・いかなる場面でも、災害に対してとっさに対処する方法を考え、行動できる態度・能力を育成する。

② 地域に関連する災害を把握することにより、生活の中での災害を理解し、自分自身の役割を考える態度を育成する。

（4）　単元計画

単元名	災害から考える
課題設定①	・東日本大震災・阪神淡路大震災・関東東北豪雨（鬼怒川決壊）・御嶽山噴火・雲仙普賢岳噴火・ハワイ噴火などの映像から、突然おそってくる災害について考える。 ・各災害に対する自らが疑問と考えた点について課題を設定。
情報収集①	・設定した課題に対する情報収集。 ・被災した方による災害講演会。討議会。
整理分析①	・収集した情報を元に、課題に対する情報を精査し、まとめる。 まとめ方には『考えるための技法』を活用する。
まとめ発表①	・各グループによる発表会＆討論会。
課題設定②	・発表を受け、山梨県において発生し得る災害について考える。 ・考えられる災害を整理し、その中から自らが疑問と考えた点を課題にする。
情報収集②	・富士山科学研究所や国交省河川事務所など、県内で情報を得られる施設訪問。 ・全国で起きた災害と山梨県に起こり得る災害について比較する。
整理分析②	・収集した情報を元に、課題に対する情報を精査し、まとめる。 ・まとめ方には『考えるための技法』を活用する。
まとめ発表②	・学習発表会。 ・調べた内容を、どのように地域に還流し、防災意識の向上や災害時対応に役立てていくのか考える。

（5）　展　開（課題設定①）

過程	学習活動・内容	教師の支援	備　考
導入	災害について考える 1　災害について 知っている災害についての種類、考えられること、対策などをウェビングマップにまとめる。 （個人→ペア）	・マップにまとめる際に、生徒・児童の思考を可視化する支援。 ・ペアで出てきた新たな視点については青ペンで記入するよう指示	ワークシート （必要に応じ）サインペン等準備 *災害に被災した関係者がいる場合には、十分に配慮する。*
展開①	2　資料映像から考える ①ウェビングマップを教室内で掲示する中で、他の児童生徒の考えを知る。共有する。 ②資料映像等（**東日本大震災・阪神淡路大震災・関東東北豪雨（鬼怒川決壊）・御嶽山噴火・雲仙普賢岳噴火・ハワイ噴火**など）を用意する中で、児童生徒共に資料から得た情報を、再度ウェビングマップに追記する。	・映像資料等を入手（過去の新聞・ニュース番組等）し、提示する。 ・追記した情報は赤ペンで記入するよう指示	ＡＶ教材 新聞記事 参考文献
展開③	3　課題設定へ向けて ①各自が作成したウェビングマップを元に、グループ内で意見交換。 ②資料映像ごとに意見交換を進める。	気になること・もっと知りたいことを支援する	
まとめ	4　探究課題の設定 各自の中での探究課題を設定する。		ワークシート

１　【中学校】社会科における指導案例　（１学年）

（1）　題 材　「身近な地域のハザードマップを使ってみよう」

（2）　題材設定の理由

身近な地域のハザードマップをもとに、具体的に行われている防災や減災の取り組みを理解し、これからの自然災害への備えを主体的に考えさせる。

（3）　ねらい

①　ハザードマップや防災気象情報を活用し、自然災害の情報を適切に読み取ったり、読み取った情報を適切に活用したりすることをとおして、身近な地域で取り組まれている防災や減災の取り組みを理解し、その知識を身につけている。

②　身近な地域防災や減災の取り組みをもとに、自然災害に対する備えを主体的に考え、その結果を適切に表現しようとしている。

③　身近な地域で取り組まれている防災や減災の取り組みや、自然災害に対する備えに関心をもち、主体的に追究しようとしている。

（4）　展 開

過程	学習活動・内容	教師の支援	備考
導入	1　近年、山梨県で起きた自然災害を思いだし、知っていることを互いに出し合う。	・自由に思い出させ、学習への意欲を高める。	映像資料
	2　ハザードマップについて知る。 ・ハザードマップについて、知っていることを互いに出し合う。 ◎ハザードマップとは→火山の噴火や津波、洪水など、さまざまな自然災害による被害の可能性や、災害発生時の避難場所などを示した地図のこと。	・ハザードマップについて、確実に理解させる。	ハザードマップ
展開	3　小グループで、身近な地域のハザードマップから情報を読み取り、対応を話し合う。		ハザードマップ ワークシート
	・ハザードマップからどんな情報が読み取れるのか？	・地形、山や河川の位置などを確認させる。	
	・身近な地域では、具体的にどんな防災や減災の取り組みが行われているか？	・いくつかの取り組みを教師が紹介する。	映像資料
	・県（または市町村）が想定する①地震、②洪水、③台風や竜巻、④火山の噴火などの自然災害が起きた場合、どんな被害が想定されるのか？ また、危険が生じた場合、どこに避難すればよいのか？	・それぞれの自然災害について、個別に扱う。	
	・①～④の災害が起きる前にどんな情報が発表されるのか知り、命を守るためにはどうすれば良いか考える。	・実際に家族で取り組んでいることなどを考えさせる。	
	4　２でわかった自然災害の危険性について、日頃からどのような備えができるのかを考える。	・個別に取り組ませ、何人かの代表に作成した表を発表させる。	まとめるための表
	5　災害発生時には自宅や学校からどのように避難すればよいのか、その経路と避難場所についても調べ、表にまとめる。 ＊災害の種類　＊日頃からの備え ＊災害発生時の行動や非難の仕方		
	6　災害から自分の命を守るために大切なことを考えさせる。	①どのような自然災害が起こる可能性があるか ②日頃から防災の備えとして何をするのか ③災害発生時の行動や避難の仕方を考えておく	
まとめ	7　今日の授業から学んだことや感想をノートにまとめる。	・防災や減災の取り組みを、自分事としてとらえさせる。	ノート

２ 【中学校】社会科における指導案例 （２学年）

（1） 題 材 「関東大震災から学ぼう」

（2） 題材設定の理由

1923 年に起こった関東大震災は、日本の歴史上最大級の地震災害である。既に９７年の歳月がたっている今日、関東大震災の内容を調べ考えることを通して、将来の地震災害に生かすことの大切さを認識させたい。

（3） ねらい

① 1923 年に起こった関東大震災の被害状況や社会の様子を調べ、被害が拡大した原因や社会への影響を考える。また、そのことから、大正時代の日本の社会の特色をつかむ。

（4） 展 開

過程	学習活動・内容	教師の支援	備考
導入	1 関東大震災の様子について調べさせ、当時の人々にどんな影響を与えたか考える。 ◎関東大震災・・1923 年９月１日午前 11 時 58 分に発生し関東地方に大被害を与えた地震 ・いつ頃、どこで起こったか。その様子はどうか。人々は何に苦しんだろうか、等を調べさせ自分なりの考えをもつ。	・関東大震災に関する資料を用意しこの時代に大きな地震があったこと、日本の歴史上最も大きな災害であることを知らせる。 ・その当時の様子を知っている人の話を示してもよい。 ・できるだけ関心がもてるように工夫する。	大百科事典 歴史資料 被災者の体験記
展開	2 関東大震災の被災地図などの資料から、被害の範囲が関東全域に及んだことをつかみその混乱の中で人々の受けた被害状況を調べ、発表し合う。 ◎死者・・・99,331 人 ◎負傷者・・102,098 人 ◎行方不明・43,476 人 ◎家屋被害・619,227 戸 ◎被害総額・当時の金額で約 65 億円 3 被害が拡大した原因は何だったのか話し合う。 ・二次災害（火災・津波・山崩れ等） ・不正確な情報（報道・通信・交通機関のマヒ） ・大火災や死者が多く出た理由は何だろうか。 4 関東大震災の混乱の中でどんな事件が起こったか。 5 石橋湛山が震災の時にどのような行動をとったか、調べる。 6 将来、身近に同じような被害が起こったら、どのようなことに気を付けたり、行動したらよいか考える。	・被害は１都８県に及び山梨県にも大きな被害のあったことを知らせる。 （山梨県の被害状況を示す資料提示） ・阪神淡路大震災や東日本大震災の被害状況等と比較させながら大きな被害があったことに気付かせる。 ・死者の大半は火災に伴う焼死者であったことに注目させる。 ・東京都全戸の 70%消失、横浜 60%消失、耐震性、昼食時間、恐怖心、消防力の不足 ・デマによる多数の朝鮮人への逮捕・暴行、社会主義者への弾圧、治安の乱れ、不況 ・石橋湛山は、自らも被災したにもかかわらず、災害発生後直ちに救護活動をすすめた。このことから、災害時の地域社会の協同体制の大切さについて考える。 ・災害の発生した時の心構え（日頃準備すべきことは・・食料、救急品） ・災害が発生した時の情報の伝え方や避難の仕方救助活動のあり方等）を考えさせたい。	災害の様子を示す写真 被害状況を示す資料 被災地図資料
まとめ	7 関東大震災から学んだことや感想をノートにまとめる。	・災害はいつ起きるとも限らないことを知らせ、自分たちの身近な問題として捉え日頃の災害対策の重要性を理解させたい。	ノート

３　【中学校】理科における指導案例　（１学年）

（１）　題 材　「地震による災害」

（２）　題材設定の理由

我が国は世界でも有数の地震国である。東日本大震災をきっかけに、地震防災の意識も高まっているが、地震の発生は防ぎようもなく、大きな被害を及ぼす地震が発生することもたびたびある。

小学校では、地震によって土地の様子が大きく変化することがあることを学ぶが、地震についてまとまった学習ができるのは、中学１年理科の本単元だけであり、地震そのものの理解にとどまらず、地震災害に対する心構えをもたせ、防災意識を高める必要がある。特に生徒が暮らす身近な地域と地震災害については生徒の興味関心が向けられるところであり、地震のゆれの大小と地域の地盤との関係や、自分の住んでいる地域の特性を知ることを通して、地震による災害に対して十分な備えをし、適切な状況判断や臨機応変に対応するため、防災に役立つような学習を進めたい。

（３）　ねらい

①　地震や地震に伴う地形の変化や災害に関心をもち、積極的に調査や考察を行うことができる。
②　過去の地震の資料などから、地震の揺れの大きい地域の特徴や起こりやすい災害について見いだすことができる。
③　県内の様々なデータから自分の住んでいる地域の危険度を知り、防災に対する意識を高める。

（４）　展 開

過程	学習活動・内容	教師の支援	備　考
導入	1　過去の大地震による被害の様子の映像を見る。	・地震による災害への関心を高めるようにする。	地震災害の映像資料
展開	2　特定の地域の震度の分布図から、地震の揺れの大きい地域はどのようなところか考える。	・資料を示し、低地の地盤の弱い新しい地層の揺れが大きいことに気付くようにする。	震度と地形・地質関係図
	3　地震よって生じる現象や被害について知り、自分たちの住んでいる地域ではどのような災害が生じる恐れがあるのか調べる。 ・地震に伴って地形が変化したり、様々な災害が生じたりすることによって、どのような被害が起きるのか、その特徴をまとめる。（断層、段丘、津波、山崩れ、地滑り、液状化現象等）	・地震による地形の変化や災害について、資料を提示したり演示実験を行ったりする。 ・国内外の地震災害の映像資料や記事を集めておき、生徒自身が利用できるようにしておく。	地震災害の映像資料、新聞記事、演示実験の器具
	・山梨県の地質図などにより、自分の住んでいる地域はどのような特徴をもった地盤か調べる。	・地盤が弱く、地震災害を被りやすいなど、自分の住んでいる地域の危険度や起きやすい災害について気付くようにする。	県内の地質図、地質断面図、ハザードマップ
まとめ	4　自分たちの住んでいる地域では、どのような災害が起きる危険があるのか、調べたことを基にグループで話し合う。	・実際に地震が起きたときに、どのような危険があり、どんな対応をしていけばよいのか考えることで、生徒自身が意欲的に防災について考えるきっかけとする。	県内の地質図 県内の活断層分布図 県内の地滑り地域分布図 ハザードマップ

（５）　評 価

①　地震や地震による災害に関心をもち、積極的に調査や考察を行うことができたか。
②　自分の住んでいる地域の地質的な特性に気づき、地震による災害に対する心構えができたか。

4 【中学校】保健体育科における指導案例 （２学年）

（1） 単元名 「傷害の防止」

（2） 単元について

自然災害による傷害の多くは災害に備えておくこと、災害発生時及び発生後に周囲の状況に応じて安全に行動すること、災害情報を把握することで防止できること、及び迅速かつ適切な応急手当は傷害の悪化を防止することができることを理解し、実生活に生かせるようにする。

（3） ねらい

① 傷害の防止について、自他の危険の予測や回避の方法と、それを選択した理由などを、他者と話し合ったり、ノートなどに記述したりして、筋道を立てて伝え合うことができる。（思考力、判断力、表現力等）

② 自然災害による傷害の多くは、災害に備えておくこと、安全に避難することによって防止できることについて、理解することができる。（知識及び技能）

（4） 展開

過程	学習内容・活動	教師の支援	備考
導入	1 過去の自然災害から被害状況を知る。 発問 阪神淡路大震災では、多くの犠牲者が出たが、その原因は何だったのだろうか？ (1)地震発生直後の死亡者数が一番多かったことを知る。 (2)資料から、死亡原因について考える。 2 本時のねらいを知る。 自然災害が発生したとき、被害を最小限にとどめるためには、どうしたらよいか考えよう。	○阪神淡路大震災の資料を基に、被害の主原因を予測させる。 ○地震発生直後の 15 分間で 80%以上の方が亡くなっていること、亡くなられた方の約８割は、建物の倒壊や家具の転倒によるものだったことを伝える。	
展開	3 地震に対する備えについて考える。 発問 個人生活における地震に対する備えとして、どんな対策が考えられるだろうか。 地震に対する備えや対策について話し合う。 〈予想される反応〉 ・家具の固定 ・飛散防止フィルム ・スリッパの着用 ・非常持ち出し袋 等 ―指導すべき内容― ・自然災害による傷害の防止は、日頃から災害時の安全確保に備えておくことが必要であること。 4 地震が発生したときの取るべき行動について考える。 発問 地震が発生したとき、どのような行動を取る必要があるだろうか。 具体的場面を提示して、自分たちの生活を振り返り、地震発生時の被害を最小限にとどめるための取るべき行動について考え、ワークシートにまとめ、よりよい適切な行動について話し合う。 ―指導すべき内容― ・地震などが発生したときや発生した後、周囲の状況を的確に判断し、冷静・迅速・安全に行動すること。 ・緊急地震速報やＴＶやラジオ等による災害情報を把握する必要があること。	○自分たちの生活を振り返らせ、話し合わせる。 ○安全な避難について、自分たちの生活を振り返らせ考えさせる。 ○安全な行動について、ワークシートに考えを記述させる。 ○正確な情報の把握が、正しい判断や行動につながることを押さえる。 ○緊急地震速報にも触れながら、ＴＶやラジオ、防災無線が有効な情報源であることを説明する。	教科書 〈評価〉 ねらい①の思考・判断・表現を評価する。
まとめ	5 本時のまとめをする。 (1)ワークシートに本時のまとめを行う。 (2)重要なポイントを確認する。 (3)教師の話を聞く。	○災害への備え、安全な避難、情報収集をキーワードとして、学んだことをワークシートにまとめさせる。	〈評価〉 ねらい②の知識・技能を評価する。

5 【中学校】技術・家庭科（技術分野）における指導案例

（1） 題 材 「安全に電気を利用するための技術について考えよう」

（2） 題材設定の理由

電気は私たちの生活を便利にしてくれる一方、感電や漏電といった危険があり、生命や財産に大きな被害をもたらすことがある。このことから、電気を正しく安全に利用できることは生活を営む上でも重要なことである。

また、災害により起こった停電から復旧した後に起こる電気による火災についても報告されており、平成７年の阪神淡路大震災、平成 23 年の東日本大震災においても電気による火災が多数発生している。電気は災害からの復旧に欠かせないものであるが、扱いを誤ると危険な状況を招き、さらには災害からの復旧を大幅に遅らせてしまう原因になってしまう。

日常の生活だけでなく、地震等の災害発生時においても自他の生命や財産を守り、更なる被害の拡大の防止のためにも、安全な電気の利用についての知識と技能を身に付けることは大変重要であると考え、本題材を設定した、

（3） ねらい

① 分電盤のはたらきと操作方法を知るとともに電気による事故を防止できるようにする。
② 電気の安全な利用についての新たな改良や応用について提言をまとめることができる。

（4） 展 開

過程	学習活動・内容	教師の支援	備考
導入	1 電気による事故にはどのようなものがあるか考える。	・電気による事故にはどのようなものがあるか考えさせる。	
展開	2 分電盤のはたらきを知り、電流制限器、漏電遮断器、配線用遮断器のそれぞれが作動した際の復旧方法を知る。	・電気による事故には漏電、感電、過熱及び短絡といった事故があることを知らせ、これらの事故防止のために分電盤が役立っていることを知らせる。 ・屋内配線展開板を使い、分電盤に装備されている電流制限器、漏電遮断器、配線用遮断器のはたらきと復旧方法を演示する。	・屋内配線展開板
	3 災害発生時における電気による事故について、発生の原因とその防止方法について知る。	・過去の大規模災害が発生した際の映像資料を用い、災害発生後に起こる問題について気付かせる。 ・特に火災について注目させ、災害発生後に起こる火災は電気が原因であることが多いことを知らせる。 ・分電盤のはたらきと関連させ、通電後の火災を防ぐための工夫や注意点について考えさせる。 ・特に災害発生後の通電には、専門家による点検が必要な場合があることに留意する。	・大規模災害が発生した際の映像資料 ・感震ブレーカー等の技術について消防署員の協力を得ることも考えられる。
	4 より安全な電気の利用について、新たな改良や応用について話し合い、提言をまとめる。	・生徒の新しい発想を認めるようにし、知的財産を生み出し活用することの価値に気付かせるようにする。	
まとめ	5 本時の振り返りを行う。	・電気の安全な利用という視点に立って振り返りを行わせる。	

６　【中学校】技術・家庭科（家庭分野）における指導案例

（1）　題 材　「災害に備えた住まい」～室内の安全対策～

（＊「内容Ｂ　衣食住の生活　住生活」の題材の中で扱う）

（2）　題材設定の理由

ここ数年の間にも日本の各地で自然災害が多数発生している。例えば、家庭で意識をして備えをするものに地震災害があるが、家族が安心して住まうためには、住空間を安全な状態に整える必要がある。家庭での課題を解決するために、身に付けた知識を活用し、安全などの視点から住空間の整え方について考え、工夫することができるようにする。他教科で行っている防災に関する授業とも関連させ、生徒が自ら進んで調査をしたり、住空間を整えたり、家族や地域へ提案したりするなど実践的な態度を育成していきたい。

（3）　ねらい（本時）

○　家族の安全を考えた住空間の整え方について、課題の解決に主体的に取り組もうとしている。

（4）　展 開

過程	学習活動・内容	教師の支援	備考
導入	・前時を振り返り、本時の目標を確認する。	・前時における学習（地域における災害の危険、災害が起きたときの避難方法や避難場所、必要な防災用品等）を振り返る。	・前時の振り返りシート、ワークシートの抜粋
展開	住まいの中の安全に配慮した地震対策を考えよう ○　班ごと割り当てられた部屋または居間の危険箇所について考える。 ・個人で考える ・グループで意見交換をし、ＤＩＧを仕上げる。 ・全体で発表する。 ○　地震対策について知る。 ○　割り当てられた部屋または居間の対策について考える。 ・ＤＩＧに追加で記入する	・写真（イラスト）をもとに、自分の経験とつなげて考えられるようにする。 ・理由とともに考えさせる。 ・家具の転倒、落下、移動、出入り口の確保などの危険を予測し危険な箇所を見付けられるように助言する。 ・安全に逃げるためには、小学校で学んだ整理・整頓が大きく関わっていることを補足する。 ○対策例の方法を紹介する。 （家具の固定道具、ガラス飛散フィルム、滑り止め等） ・できそうな対策について追加させる。 各グループのＤＩＧを並べて見られるようにする。	・子ども部屋の写真またはイラスト ・居間の写真またはイラスト ・ワークシート ・家庭内ＤＩＧ（部屋、居間） ・対策グッズやその写真等
まとめ	・振り返りを記入する ・次時までの課題を確認する	・地震対策についてまとめる。 ・次時は本時をもとに、各家庭での対策を考えることを伝え、課題を確認する。 ・各家庭での対策の方法 ・対策を工夫したい部屋などの場所を１つ決めてくる （家庭環境に配慮する）	・振り返りシート

7 【中学校】道徳科における指導案例 1/2

（1） **主題名** 「集団の中の自分の役割」Ｃ－（１２）社会参画、公共の精神

（2） **資料名** 「温かい心」（神戸市立大沢中学校１年 仲前江利子さんの作文）＊次頁参照

（3） **主題設定の理由**

95 年の阪神淡路大震災は、「天災は、忘れた頃にやってくる」と言う諺の通り、私たちに強烈なショックを与えた。生徒も、テレビや新聞等のメディアを通じて地震のこわさを知り、救助や復興に対して、さしのべた多くの人々の活動を見聞きしている。また、生徒会やクラスなどで、募金や励ましの手紙を集め、被災者におくる活動も、全国で行われ多くの生徒も参加している。

その中で、避難所にいた中学生のつくったミニ新聞の活動が、情報の少なかった被災者への情報提供源として、たいへん役立った事がテレビで放映された。地震直後のパニック化した状態や、落ちつきを取り戻し、復興に向けての活動が進む様子を体験した中学生の作文をとおして、集団に寄与する仕事について考えさせたい。集団が人間相互の依存関係でつくられており、そこに、積極的に参加することを考えることによって、「集団の中に生きる充実感」への思いをふくらませたいと考えて、この主題を設定した。

（4） **ねらい**

自分の生活を見つめ、人間の素晴らしさを考えることを通して、自ら積極的に行動することによって、集団の一員としての喜びと充実が得られることに気付き、積極的に協力し合おうとする意欲を育む。

（5） **展 開**

過程	学習活動と主な発問	予想される生徒の反応	指導上の工夫・留意点
導入	1 阪神淡路大震災についての映像資料を見て、地震による甚大な被害の状況と、被災者の様子について知る。 ○もし、自分がその場にいたら、何を考え、どんな行動をするかどうか。	・逃げる。 ・どうしていい分からなくなる。 ・家族のことが心配になる。	・映像を視聴することで震災の様子を知り、課題意識につなげる。
展開	2 教材「温かい心」を読んで考える。 ○自分も被災者であるにも関わらず、ボランティアとして活動できるのは、なぜだろう。 ○わたしたちも似たような思いを抱いたことはないだろうか。 ○人間が心の奥にもっている素晴らしいものとは、どんなものだろう。 ◎わたしたちももっている素晴らしさを生活の中で生かすことはできないだろうか。【中心発問】	・周りの人が困っているから。 ・こういう時こそ、助け合わないといけないと思うから。 ・困っている友達に対して。 ・けがをした人を見たとき。 ・人間愛 ・思いやり ・友達への接し方を改善する。 ・自分のことだけではなく周りのことも考えて行動することでよいクラスになる。	・活動しないではいられない思いを感じ取れるようにする。 ・経験を想起し自分にも積極的に人のために行動しようという思いがあることに気付かせる。 ・自分の中にある思いやりを生かし、集団生活をよりよくするための具体的な方法を考えられるようにする。併せて、そのことが自分自身の喜びになることにも気付かせるようにする。
まとめ	3 本時のまとめとして、学級のことを考えて行動している事例等を紹介する。		・実践への意欲付けになるようにする。

（6） **評 価**

・他者の意見を聞き、人間の素晴らしさについての考えを広げているか。（多面的・多角的な見方）
・自ら積極的に行動することによって、集団の一員としての喜びと充実が得られるということについて、自分の生活を見つめ、振り返りながら考えているか。（自分自身との関わり）

7 【中学校】道徳科における指導案例 2/2

（7） 教材「温かい心」（生徒作文）

それまでは、みんなが幸せに暮らしていた。あの出来事が起こるまでは…。

三連休が終わり、明日は学校に行くという、平成７年１月 17 日、午前５時 46 分、思いも寄らぬ出来事が起こった。それは、神戸を中心にした大地震。

私は、その時もちろん寝ていた。しかも、前日からかぜぎみで、その日は休むことにしていたのだ。「ゴオー。」という地鳴りがし、激しく縦に揺れた。その瞬間、「地震だ。」とはすぐわかったが、何もできなかった。地震が来たら机の下に入るとふだんからわかっているが、いざそうなれば行動できるというものではない。

私は、心臓がドキドキしていた。手さぐりでかい中電灯を見つけ、ラジオを聞いた。六甲山の南側、つまり、神戸という都市が数十秒にして、めちゃめちゃになってしまったと報道していた。私は、全然信じられなかった。私の住む大沢町には、大地震が来たという風景はどこを見てもなかったが、一つ山を越えた神戸の町は、まるで別世界の感じであった。長田区では、すぐにあちこちで火災が発生し、助けるにも助けようがない状態であった。

百人足らずの死者がでたという、最初のニュースでさえショックであったのに、二日、三日と過ぎるうちに、その数は千人、二千人となっていった。地震が発生した夜、学校に避難したものの、人数が大勢なので入れない。冬なので寒く、毛布もなく震える人たち。これからどうなるかと、不安になってきた。

しかし、全国各地から救護物資が届いた。毛布、おにぎり、水。全然足らなかったけど、物資と一緒に温かい心も運ばれてきた感じがした。被災の人たちには十分に物資がいきとどかなくて、もめごとも起こったりした。つかれもたまり、特にお年寄りにはつらかったと思う。

けれど、明るいニュースもあった。日本だけでなく世界中から、いろんなものが送られてきた。救護犬も連れてこられ、生き埋めになった人のために一生懸命がんばっていた。ボランティアの人も実は被災者、医者も被災者なのに、神戸のためにがんばっていた。私は、すごくうれしくなった。私はこれまで、お年寄りに対するやさしい心は人々にないのかと思ってきた。けれど、集まったボランティアの人たちは、お年寄りのために食事を運んだりといろいろなことを心をこめてしていたと思う。また、小さい子どもたちには、地震なんか何のことかわかっていない。揺れた瞬間、急に家が倒れ、家族と別れるつらい思いをした。その心をなぐさめてくれたのも、ボランティアの人たちだったと思う。

大沢町の人も、少しでも役に立てたらと、炊き出しをした。冬なので、あたたかいものをと考え、豚汁などを持っていった。消防団の人たちは、おにぎりを何度も持っていった。一つの家で 40 個ぐらいを作ったが、私も一生懸命手伝った。

そんな中で、別の問題も出てきた。よく食料が届く避難所と、あまり届かない避難所が出てきたのだ。それでも、ボランティアの人たちは、あちこち走り回って食料を持ち運んでいた。

５か月が過ぎようとしている今、仮設住宅ができてきた。いまだに避難所暮らしという人もいる。私たちの町に近い鹿の子台にも、たくさんの仮設住宅ができてきた。早くみんなが落ち着けたらいいなと思う。今、神戸は元気に復興しようとしている。職業がなくなり、必死にさがしている人もいる。家族と別れ別れになって、悲しい思いをしている人もいる。けれど、この悲しみをふりきってほしいと思う。

そして、たとえ月日が経っても忘れてはならないのは、世界中の人々の温かい心だと思う。私が、今回の地震で特に感じたのは、人間は心の奥に、すばらしいものをもっているのだということである。

復興していく神戸のために、私にできることがあれば、よろこんでしていきたいと思う。

神戸市立大沢中学校１年 仲前江利子

8 【中学校】学級活動における指導案例 （全学年）

（1） 題材 「自然災害と防災」学級活動（２）－エ

（2） 題材設定の理由

この地球上で自然の一員として人間が生活している以上自然災害は避けて通ることはできない。そして今も世界の至る所で自然災害が発生し、数多くのかけがえのない生命や大切な財産が失われている。わが国においても未曽有の被害を出した東日本大震災は記憶に新しいところである。各種の自然災害から身を守り、二次災害を防止し、被害を最小限にとどめることは、他の何よりも優先されるべきものである。そして個々の生徒が自然災害への理解と関心を深め、災害に対して適切に対処する能力を身につけることは急務である。

（3） ねらい

① 過去の主な自然災害についての認識を深める。
② 被害を最小限にするための方策を考える。
③ 防災に対する関心を高める。

（4） 展 開

過程	学習活動・内容	教師の支援	備考
導入	1 最近発生した自然災害の概要をつかむ。 ・いつ、どこで、どのような ・被害のようす	・最近の大震災を思い出させる。 ・新聞等の記事を紹介して補説する。	
展開	2 自然災害の種類を知る。 ・地震・台風（大雨．強風）など ・山崩れ・洪水など ・火山噴火 3 過去の主な自然災害について理解を深める。 ・事前に班ごとに割り振って調べさせておいた主な自然災害の概要を被害のようすを中心に発表する。 ・熊本地震、東日本大震災、中越沖地震、阪神・淡路大震災、北海道南西沖地震、関東大震災、伊勢湾台風、昭和34年災害、桜島大正噴火、伊豆大島噴火、雲仙普賢岳噴火、御嶽山噴火 など 4 地震災害を中心にして自然災害から生命や財産を守ったり、被害を最小限にするためには、どんなことをしたらよいのか考える。 ・避難訓練を実施する。 ・防災用品をそろえておく。 ・自然災害の発生原因などを学習する。 ・お互いに協力し助け合う。など	・大まかな分類にとどめる。 ・他の災害と比べて地震は今もっていつどこで起きるかの予知が難しいことを押さえておく。 ・地球上のどこかで絶えず自然災害が発生していることを資料を使って説明する。 ・日本は、特に地震による被害が多いことを知らせる。 ・地震はその後に火災を発生させて被害を大きくしていることを押さえる。 ・過去の災害の教訓を生かすようにする。 ・日頃から防災意識を高めておき、いざというときに適切な行動がとれるようにしておくことを例をあげて説明する。	板書 板書
まとめ	5 今日の授業を振り返り、自然災害に対する日常の備えについて自分の取り組みの感想をノートにまとめ、発表する。	・一人ひとりの生徒の意思決定を促す。	ノート

（5） 事後指導

① 短学活などを利用して、地震以外の自然災害を話題として取り上げる。
② 避難訓練の事前指導に生かせるようにする。

９ 【中学校】避難訓練における指導案例 （全学年）

（1） 想 定 「清掃中に起きた地震（震度５強）」学校行事（３）健康安全・体育的行事

（2） ねらい

① 清掃班ごとに迅速な避難行動がとれるようにする。
② 班長として適切な避難誘導ができるようにする。
③ 大地震に備えて第一次から第三次避難までの一連の動きを経験する。

（3） 展 開

過程	教師の活動	生徒の活動	指導上の留意点
第一次避難	1 地震発生時における基本行動の指導と援助 ・火の始末 ・出入口の戸の開放 ・教室にいる場合の机の下への避難指示 ・廊下や階段にいる場合の窓から離れる避難指示 ・けが人の確認 ・班長への助言と班員への指導	○事前指導による清掃場所ごとの避難行動 ・荷物は清掃場所へ持っていく。 班長－基本行動の指示を出す。 班員－部長の指示に従う。	○生徒全員が班ことに決められた場所で清掃活動をしている。教師も担当場所に行き清掃の監督を行っている。班長に事前指事をしておく。 ○放送による支援の指示。
第二次避難	2 校庭への避難行動の指導と援助 お おさない か かけない し しゃべらない も もどらない ち ちかづかない 「お・か・し・も・ち」を基本とするが、状況に応じて必要な話をしたり、走ったりして避難することもある。 3 校庭での学級ごと、班ごとの整列指導と援助 ・学級担任による生徒確認 ・負傷者の確認 ・学年主任への報告 ・校長への報告 ・学級会長への助言と生徒の指導	○清掃場所から校庭への避難行動 ・全員荷物を持って行動する。 班長－先頭に立つ。 班員－班長の後を並んで移動する。 ○各学級とも班ごとに整列 班長－班員を確認し、学級会長へ連絡する。 班員－班ごとに整列する。 学級会長－各班長からの報告を受けて、学級担任に報告する。	○整然、迅速、無言を徹底させる。清掃場所を離れていた生徒への対応。 ○各班内での整列と班長の確認を徹底させる。 ○班員を確認できた班から座らせる。 ○教師側での生徒の確認と校長への報告を迅速に行う。
第三次避難	4 学校外への避難行動の指導と援助 ・学級ごとまとまって移動 ・教師の引率する位置の確認 5 避難場所での整列指導と援助 ・教師の活動は３と同様	○校庭から学校外への避難移動 ・全員荷物を持って移動する。 学級会長－先頭に立つ。 学級生徒－班ごとに移動する。 ○避難場所での学級ごと班ごとの整列 班長－3と同様に行動する。 学級会長－3と同様に行動する。	○避難場所と避難経路を事前に調べておく。 ○避難場所での動きは３と同様。 ○評価の観点に立った講評を行う。
事後	6 各係で、避難訓練について振り返る。 ・放送に頼らず、自分で判断ができたか ・生徒の危険を想定できたか ・課題に自ら気付けたか 7 生徒の「気付き」や課題と教職員の「気付き」や課題を共有し、次の防災教育に生かす。	○教室に戻り、避難行動について振り返る環境をつくる。 ・生徒の行動を振り返らせる。 ・生徒が気付かなかったことを指摘する。 ・日常生活での危険について考えさせるなど ○必要に応じて、班や学級で話し合わせる。	○自分のとった行動を振り返る。 ・先生の指示の前に避難行動について考えたか ・避難中に危険を予測できたか ・命を守る上で気付いたことは何かなど ○気付いたことを班や学級で共有する。

※ここでの事例は、基本的な行動を示している。各学校の状況や震度によって、適切な行動ができる判断力をつけたい。
※生徒の健康状態、精神状態を常に把握し、心のケアに配慮する。

Ⅶ-1　校種別・領域別指導案例　【高等学校】

1　【高等学校】地理総合における指導案例

（1）　**題材**　「生活圏の防災　ー火山災害を例にー」

（2）　**題材設定の理由**

・科目「地理総合」は必履修科目であり、すべての生徒が、日本をはじめとする世界や生徒の生活圏における自然災害と防災について学ぶ。「私たちのまちは、自然災害に対してどのような備えが必要なのだろうか」と問い、生徒が居住する地域やその周辺で過去に発生した自然災害等を題材にして、探究的に考察し、地形図やハザードマップなどの主題図の読図など、日常生活と結び付いた地理的技能を身に付け、防災意識を高めていきたい。

（3）　**ねらい**

①これまでの学習（地図や地理情報システムと現代世界など）を踏まえ、自然環境と予想される自然災害（例：火山災害）との関わりについて考察できるようにする。

②火山ハザードマップなどから必要な情報を読み取ったり、複数の地図を重ね合わせて関連付けたりする技能を身に付ける。

（4）　**展開**

過程	学習活動・内容	教師の支援	備考
	私たちのまちは、自然災害に対してどのような備えが必要なのだろうか。		
導入	1　仮説の設定 ・学校が所在する市町村が発行するハザードマップから、想定する主な災害（例：火山災害）と危険性の高い地域を読みとる。 ・その場所の危険性が高いと評価される理由について、仮説を設定する。 （地形的要因、溶岩流・土石流など）	・「なぜ、その場所は危険性が高いと評価されているのであろうか」と発問する	・ハザードマップポータルサイト（国土交通省）
展開	2　仮説の検証と調査結果の整理 ・新旧地形図やインターネット等で閲覧可能な土地条件図や図書館等で入手可能な過去の災害に関する資料などの収集、野外調査などを基に、仮説の検証を行う。 ・複数の地図から読み取った情報を関連付けて、地域の特徴をまとめる。 例えば、溶岩流は、より低い場所に流れていくため、山頂から延びる尾根のうち、大きな尾根と尾根の間を流れていく。溶岩流の到達範囲と到達予想時間を区分するなど。	・仮説の検証に当たって、野外調査、文献調査の結果を踏まえて、十分な議論が行われるようにする。 （留意事項） ・火山ハザードマップは，噴火の様式や規模により、各現象の到達する範囲が異なるため、どのような前提条件に基づいて描かれているかなどに留意する。 ・専門家や関係諸機関等と連携・協働を図り、活動を充実させる。	・地理院地図 ・山梨県富士山科学研究所ホームページ
まとめ	3　まとめ ・市町村役場、避難場所、病院などの防災にとって重要な施設の位置、集落の分布や規模などに留意して、区分したそれぞれの地域の自然及び社会的条件に合わせた避難計画や防災のための施策の在り方について考察する。	・「区分したそれぞれの地域では、自然災害（火山災害）に対して、どのような備えが必要だろうか」と発問する ・「溶岩流以外の火山現象に対して、どのような備えが必要だろうか」「火山災害以外の自然災害に対して、どのような備えが必要だろうか」と発問するなど、生徒に追究させるような問いを設定する。	
	私たちのまちは、自然災害に対してどのような備えが必要なのだろうか。		

（5）　**評価**

①　自然災害を基に、地域の自然環境の特色と自然災害への備えや対応との関わりとともに、自然災害の規模や頻度、地域性を踏まえた備えや対応の重要性を理解している。（知・技）

②　地域性を踏まえた防災について、自然及び社会的条件との関わり、地域の共通点や差異、持続可能な地域づくりに着目して、多面的・多角的に考察し、表現している。（思・判・表）

③　まちの防災対策について、よりよい社会の実現を視野に自然災害への備えや対応などを主体的に追究している。（主）。

２ 【高等学校】ＬＨＲ・総合的な探究の時間等における指導案例 ①

（１） 題材 「自然災害（大規模地震、風水害、雪害、火山災害など）と防災」

（２） 題材設定の理由

東日本大震災は日本各地に大きな被害をもたらした。山梨県でも東海・東南海・南海の南海トラフ地震や、活断層による直下型地震など甚大な被害を及ぼす恐れのある地震が起こると言われている。また、地震だけでなく、富士山噴火の可能性も指摘されている。さらに、近年の気象変動による集中豪雨や突風等の災害も増加している。さまざまな自然現象による災害が起こっている状況の中、地震や火山活動等の仕組みを理解し、自然現象による災害の実態を知ることにより、防災意識が高まると考えられる。

（３） ねらい

昨今および今後発生が予想させる自然災害の実態を知り、山梨県における南海トラフ地震や富士山噴火及び風水害、洪水等の被害想定を理解することを通して防災意識を高め、日々の備えや行動に移すことができる。

（４） 展 開

過程	学習活動・内容	教師の支援	備考
導入	1 日本の自然災害 ・日本の自然災害について考える。 ・自然現象による災害の実態を知る。 ・山梨県で予想される自然災害について考える。	・どのような自然災害が多いかを考え、発表させる。 ・動画等を用い、地震、噴火、集中豪雨等が甚大な被害をもたらすことの凄さを理解させる。 ・どのような自然災害が起こる可能性が高いかを考えさせる。	防災危機管理課「山梨県地域防災計画」 チャレンジ！防災４８ フェアリーじじょ きょうじょ ※「やまなしの防災教育」（山梨県 HP）等
展開	2 地震・噴火 ・地震発生の仕組みを知る。 ・南海トラフ地震等による被害想定を知る。 ・主な火山現象について知る。 ・富士山の噴火警戒レベルを知る。 3 地震・噴火以外の自然災害 ・気象変動による災害の実態を知る。	・地震発生の仕組み（海洋型巨大地震、内陸型地震）を理解させる。 ・南海トラフ地震等により予想される被害（液状化、ライフライン被害等）及び南海トラフ地震情報について理解させる。 ・噴火警報が対象としている主な火山現象について理解させる。 ・富士山の噴火警戒レベル及び想定される現象について理解させる。 ・新聞記事等も参照し、近年、水害や土砂災害による甚大な被害がで発生しており、災害に備える重要性を確認する。竜巻・雷等についてもふれる。	NHK 高校講座「地学基礎」 南海トラフ巨大大地震（内閣府 HP）等 防災危機管理課「山梨県地域防災計画」 富士山の活動状況（気象庁 HP） NHK 備える防災「水害」等
まとめ	4 まとめ ・災害をもたらす要因及び被害を少なくする方法を考える。	・災害対策として私たちが日頃から心がけておくこと、備えておくことについて意見交換を行う。	防災危機管理課「山梨県地域防災計画」

（５） 評 価

① 昨今の、または今後発生が予想される自然災害について理解している（知・技）

② 山梨県における南海トラフ地震や富士山噴火及び風水害、洪水等の被害想定から「心がけ」につなげることができる（思・判・表）

③ 防災意識を高め、日々の備えや行動に移すことができる（主）。

３ 【高等学校】ＬＨＲ・総合的な探究の時間等における指導案例 ②

（１） 題材 「災害（地震）発生時の対処方法」

（２） 題材設定の理由

突如として発生する地震にどのように対処すればよいのか、あらゆる場面を想定して生徒とともに考え、最良の方法を見つけ出し、生徒各自が主体的に対処できる態度・能力を養う。そのためにも地震について、日頃からの避難組織体制の整備・熟知と避難訓練が肝要である。

（３） ねらい

地震に対する日頃からの心構えの重要性を確認し、災害発生時において状況を正しく認識し、冷静に判断、行動ができる態度、能力を育成するとともに、危険箇所の確認などを通して避難経路を設計し、主体的に避難態勢の組織化を図る。

（４） 展 開

過程	学習活動・内容	教師の支援	備考
導入	１ 地震発生時の心構え ・安全の確保を最優先に行動する。 ・初期消火、出火防止に努める。 ・建物の倒壊、道路の陥没、崖崩れ、落下等に細心の注意を払う。 ２ 地震発生時の状況を想定 ・校舎は耐震化されている。 ・大地震でも主要動は数分程度 ・備品の倒壊に注意する。 ・余震で建物の被害が拡大する。	・初期動作のための心構えを習知させる。 災害発生時の状況を正しく認識し、冷静に判断、行動することを意識させる。	今日から始める私の防災のページ（内閣府防災情報のページ）等 第１編 自然災害編ー第１章 大規模地震編ー３「１地震発生時のこころがまえ」
展開	３ 第一次行動（緊急避難） 場面に応じた避難について考える。 ・普通教室 ・廊下 ・階段 ・特別教室（理科・家庭科・職業科など） ・体育館・格技場 ・校庭 ・プール ・休み時間 ・放課後 ・クラブ活動 ・学校行事（学園祭・球技会など） ・校外行事（修学旅行・遠足・企業見学） ・登下校時 ４ 第二次行動（安全な場所） ・安全な場所で学級（クラブ）ごとに集合 ・人員の確認、担任（顧問）に報告 ・負傷者の確認 ５ 避難経路図の作成（＊DIG による校内調査） ・あらゆる場所からの避難を想定し、グループで作成する。出来上がったものと、既存のものとを比較検討する。 ・危険箇所、施設・設備の点検 （防災マップの作成） ・学校周辺を歩きながら、危険箇所（崖崩れ、建物の倒壊、暴風雨による浸水の恐れのあるところをチェックする。	以下の点に留意する。 ・教師の指示に従う。 ・頭部を保護する（机・カバン等で） ・危険箇所から離れる ・火気の始末 ・薬品等の処置 ・ガスや電源の切断 ・出入り口の確保 ・落下物、倒壊物からの避難 実際に校内（校外周辺）を歩きながら危険箇所にチェックしていく。何がどのような状況で危険なのかを明記する。	第１編 自然災害編ー第１章 大規模地震編３「１地震発生時の心構えと状況」 地震ではどうのうな災害が起きるのか（首相官邸ＨＰ）等 DIG 【Disaster(災害)Imagination(想像)Game(ゲーム):災害図上訓練】 校内見取り図 避難経路図 学校周辺の地図 数色のサインペン
まとめ	６ 地震発生時から第二次行動まで、安全を確保し行動するための流れを確認する。	・日常の心構え ・集団行動と訓練	

（５） 評 価

① 地震に対する日々の備えや心構えについて理解している（知・技）
② 災害発生時に冷静に、判断、行動ができる（思・判・表）
③ 避難経路の設計など主体的に防災対策に取り組むことがとができる（主）。

４　【高等学校】ＬＨＲ・総合的な探究の時間等における指導案例 ③

（１）　題材　「災害発生時における救護方法と応急処置」

（２）　題材設定の理由

災害発生時には、医師による治療を受けるまでに時間を要してしまう場合が想定される。適切な応急手当は、障害や疾病の悪化を軽減し、身体が時間の経過とともに損なわれていくことを防ぐため、期待される役割は非常に大きい。ここでは、科目「保健」での学習内容を深め、応急手当について、より実践的な知識と技術を発展的に習得する。

（３）　ねらい

災害発生時における応急手当の意義について理解し、実践的な技術を習得する。また、習得した技術を様々な場面で活用することができることを目指す。

（４）　展　開

過程	学習活動・内容	教師の支援	備　考
導入	1　災害の状況と傷害 ・地震の際、起こりやすい傷害について知る。 ・災害の場面に応じてどう対処したらよいかなど救護方法について意見を出す。	・どのような傷害が多いかを考えさせる。 ・事例を交え、できるだけ状況を想定して考えさせる。 ・大災害直後には救急車や病院等に頼れない場合が多いことを理解させる。	応急手当(防災タウンページHP）等
展開	2　応急救護の意義と重要性 ・応急救護に必要な事がらを考える。 ・軽度、重度の負傷者に対してどう対処すべきかを考える。 3　応急処置の実践的技術 ・心肺蘇生法の原理とその方法を理解する。 ・心肺蘇生法の手順と方法を理解する。 ・AED の使用法を学ぶ ・大出血や骨折の応急処置を知る。 （教科「保健」でも指導）	・応急救護の重要性を理解させる。 ・応急救護に必要な救護用具、医薬品等について考えさせ、その目的や使用方法について知るところを述べさせる。 ・応急処置とは医師の手当てを受けられない緊急時一時的に行う手当であることを理解させる。 ① 救命の連鎖 ② 救助者が守るべきこと ③ 状況の観察・傷病者の観察 ④ 傷病者の安静 ・一次救命措置の手順を学ぶ。 ① 心肺蘇生（ダミーを使った実践） ② ＡＥＤの使用法（ダミーを使った実践） ③ 止血法、骨折などの手当 ・実際には、ラップやポリ袋、新聞紙、割り箸等を代用する場合が多いことに触れる。	応急手当動画集(災害医療ＨＰ）等 ※外部から専門家を講師として招聘し、実施することが望ましい。 副木、三角巾、救急法ダミー ＡＥＤ
まとめ	4　まとめ ・平常時においても、習得した技術を活用し、社会貢献につなげていく。	・自助、共助、公助が機能して、災害に備えることができることを確認する。	

（５）　評　価

①　応急処置の意義を理解し、実践的な技術を身につけている（知・技）。
②　災害時においても、冷静に適切な判断を行い、応急処置を行うことができる（思・判・表）。
③　習得した技術を日常生活でも有効に活用している（主）

５ 【高等学校】ＬＨＲ・総合的な探究の時間等における指導案例 ④ 1/2

（１） 題材 「防災ボランティア活動」

（２） 題材設定の理由

生徒が支援者としての視点から、防災ボランティア活動等を行うことを通じて、安全で安心な社会づくりに貢献する意識を高める。例えば、被災地での災害ボランティア活動について学習することにより、ボランティア活動への意識を高め、間接的なボランティア体験によって、実際に被災地で災害ボランティア活動を行う取り組み同様の教育効果を見込めることが必要である。

（３） ねらい

① 災害時のボランティア活動の実践事例について学習し、その大切さを理解させる。
② 自発的な活動ができるよう実践への道筋を学ばせる。

（４） 展 開

過程	学習活動・内容	教師の支援	備考
導入	1 災害後の現地の様子、状況について知る。 ・東日本大震災 ・平成２６年豪雪 ・西日本豪雨 ・平成元年台風 など 2 ボランティア活動実施例 ・がれきの撤去・清掃活動・花壇作り ・子ども（幼児・小学生）と交流 ・花壇植栽作り ・演奏会の実施等	・災害時にたくさんのボランティアが活動していたことを紹介する。	チャレンジ！防災４８ フェアリーじじょ きょうじょ ※「やまなしの防災教育」（山梨県 HP）等 新聞資料
展開	3 災害ボランティア活動について 実践例をもとに、どのようなボランティア活動が可能か考える。 ・片付けや清掃 ・炊き出し ・交流 ・物資の提供 など 4 災害ボランティア活動のルールやマナー ・ボランティア活動において大切なのは何か ・ボランティア活動の準備、服装、手続き ・迷惑ボランティアについて ・NPO、NGO の支援について	・グループワークによる取り組みをさせる。１班４名程度（例） ・ボランティア活動は多岐・広域にわたって需要あり、多くの人の協力が必要であることに気づかせる。 ・自分自身の安全や手続きの他、被災者の気持ちに寄り添い、優しさや思いやりを届けることの大切さに気づかせる。	災害ボランティア活動の始め方（政府広報オンライン HP） 新聞資料
まとめ	5 本時の振り返りとまとめを行う。	・自助、共助、公助が機能して、災害に備えることができることを確認する。	

（５） 評 価

① 防災ボランティアの意義を理解している（知・技）。
② 様々な場面で、どのようなボランティアが可能か判断し、実践につなげる（思・判・表）。
③ 日々の生活においてボランティア精神を発揮している（主）

５ 【高等学校】ＬＨＲ・総合的な探究の時間等における指導案例 ④ 2/2

【参考】ボランティア活動の実例

「東日本震災被災地訪問ボランティア活動について」

吉田高校　生徒会主任

本校では、生徒会の呼びかけで夏休みに入った平成２４年７月２４日・２５日の１泊２日、宮城県村田町と山元町を訪問しました。参加したのは生徒会長・副会長の他、参加を希望した生徒１８人でした。平成 24 年３月に宮城県村田町から高校生及びボランティアスタッフを招き、震災復興についてのパネルディスカッションを本校で開催したことがきっかけとなり、村田町社会福祉協議会のコーディネートで訪問ボランティア活動をすることになりました。今回の活動内容は、震災から一年以上経過してもなお、仮設住宅に閉じこもりがちなお年寄りへの傾聴ボランティアと、吉田の郷土料理「吉田のうどん」の炊き出しを行うというものです。炊き出しの経費は、生徒総会で決議されたとおり、学園祭のバザー・模擬店の売り上げの一部と、日本赤十字社からの補助金で賄いました。　―中略―

生徒から「私たちにできることは小さいがその積み重ねが大切」「一回で終わらせてはいけない、継続が大切」「人とのつながりの温かさを学んだ」「元気を届けようとしたが逆に元気をもらってきた」など参加した生徒全員が、有意義であったとの感想を述べていました。生徒達は、自分のことはすべて自分で責任を持ち、その上でボランティア活動を行うことが大切だということも学びました。最後に引率した私自身も、このような体験活動は、日頃の教育活動の中では得ることのできない大きな教育効果があったと確信し、被災地を後にしました。

参加生徒の感想文

吉田高校　１年生

東日本大震災について、１年４ヶ月が過ぎた。最近はテレビ報道でも取り上げられる機会が少なくなった。被災地の現状や被災者の様子など、復興の進度はまったくといっていいほどわからなかった。私たちの日常生活から遠くなりつつある今、それを直接自分の目で確かめたいと思い、この被災地ボランティアに参加した。

実際に被災地に行ってみると、自分が想像していた以上に、未だに瓦礫が山積みになっていた。そして、津波で流されてしまった線路や家がそのまま取り残されており、震災直後にテレビで見たときと何一つ変わっていない状況に驚いた。また、被災された方々に直接会って話を聞くことができた。その中で、被災者の方々から「ありがとう」という感謝の言葉を何度もいただいた。「ありがとう」の言葉の中には、被災者の方々のどのような気持ちが込められているのか考えてみた。長い時間をかけて遠くの山梨から会いに来てくれてありがとう。こうしたボランティア活動を計画し、被災地の現状を知ろうとしてくれてありがとう。私たちの話を聞いてくれてありがとう。被災したときの状況や、今の私たちの思いを皆に伝えてくれてありがとう。たくさんの意味が込められているのだと思った。被災者の方々の気持ちに応えることが自分にできることだと、今回このボランティア活動に参加してわかった。

１年４ヶ月経った今、震災直後に比べてボランティアに来てくれる人が少なくなったと言っていた。被災地も復興しつつあるだろうという考えで、ボランティアが減っているのではないかと思う。実際に被災者の方々と触れ合って、生活環境は本当に徐々にではあるが整い始め、気持ちの面でも落ち着きを取り戻しつつあるように感じた。話をする中で感じたことは、東日本大震災を忘れてほしくない、風化させてはいけないという強い思いを持った方々が多いということだ。震災直後の酷かった状況や現在の生活から、まだまだ継続的な支援とボランティア活動が必要だということを、周りに伝えていきたいと思う。

被災地での体験は、人と人とのつながりについて深く考える機会になった。それと同時に、自分がどれだけ恵まれた環境の中で生活できているのか、全ての人に感謝しなければならないと思った。今後も、自分にできることを考え、様々なボランティア活動に積極的に参加していきたい。

６ 【高等学校】ＬＨＲ・総合的な探究の時間等における指導案例 ⑤

（１） 題材　「災害時の心の健康について」

（２） 題材設定の理由

これまで経験のない大きな災害により、誰もが一時的にパニックに陥り、誰もがストレスフルな状態になることが予想される。また、生命に関わるような出来事に遭遇すると、被災者だけではなく、それを間接的に見たり聞いたりした体験によっても心が普段と違う状態になる。こうした災害時の心の動きや、ストレスの仕組みについて理解を深め、その後の日々の生活において心の健康を保つことができるような力の育成を図る。

（３） ねらい

ストレス発生のしくみについて理解を深め、災害時においても落ちついた行動や心身でいられるような知識、技能を身につける。また、パニックやストレスは誰にでも発生し得ることであり、心の健康を保つためには、援助を求めることも大切な能力であることを理解する。

（４） 展　開

過程	学習活動・内容	教師の支援	備考
導入	○本時の目的を共有する。 １　災害発生時の心理 ・災害発生時にはどのような心理状態になるだろうかを考える。 ・災害発生時、適切に判断し、行動するためにはどうしたらよいか意見を述べる。	・災害時に予想される、正常性バイアス、他愛行動、同調バイアスについて事例を通して理解する。 ・災害発生時に冷静になることが最も重要であることを理解させる。 ・パニックに陥らないための方法を考えさせる。 ・まず、自分の生命を守るための行動が取れるような状態を考えさせる。	子どもの心のケアのために－災害や事件・事故発生時を中心に（文部科学省）、事例等
展開	２　災害時における心理 ・ストレスが起こるメカニズムおよびストレスの原因となるストレッサーについて理解する。 ・災害時に個人としてできるストレス対処、他者のためにできる支援を話し合う。 ・災害後のトラウマティックストレスや PTSD について理解し、適切な対処を知る。 ・どのようなリラックスの方法があるか、意見を出し合う。	・ストレス反応を調べるチェックリストを利用し、各自のストレスの程度を把握させる。 ・ストレッサーには、生活環境ストレッサー、外傷性ストレッサー、心理的ストレッサーがあることに触れる。 ・ストレス反応は、ストレッサーに対する自然な反応であることを理解させる。 ・ストレッサーには「いのちに関わる出来事」があり、こうした出来事に伴う反応や PTSD について説明する。 ・ストレス反応を回避し、心身の健康な状態に回復させるための方法として、リラックス（セルフコントロール）することがあげられることを理解させる。	心のケアの基本（文部科学省ＨＰ） 災害時の心のケア（日本赤十字社） ※外部から専門家を講師として招聘し、実施することが望ましい。
まとめ	３　まとめ ・この授業について、自分にとってどのような体験だったか生徒同士でわかちあい、発表する。 ・他者を支援するために自分ができることについて意見を出し合う。 ・この授業を受け、学んだことを災害時や日常生活の中でどのように生かすことができるのかまとめる。	・パニックやストレスの発生は誰にでも起こり得ることであることを確認する。他者からの援助を受けることの必要性や、自分にも他者のために役立つことがあることを理解させる。 ・ストレスに対して、セルフコントロールにてすべて一人で対応し、解決しなければならないのではなく、援助を求めることも大切な能力であることを理解する。 ・日頃から、自分自身の「心の健康」保つように心がけることの重要性に触れる。	

（５） 評　価

① パニックやストレスについての理解を深めている（知・技）
② 災害時に個人としてできるストレス対処、他者のためにできる支援し、実践につなげる（思・判・表）
③ 日頃から心の健康を保とうとしているか（主）

【指導上の留意点】

指導案例では、『災害時においても落ちついた判断と落ちついた行動や心身でいられるような知識、技能を身につける』という目的や意図がある。被災による心理や心の健康について、「生徒が何を学ぶべきか」という視点で授業を行いたい。

災害時において、事実を認められず、受け入れられない反応や感情を発散できず押し込めることは、トラウマティックストレス反応のひとつ「回避・マヒ」と呼ばれる反応で、誰にも生じる自然な反応である。事実を認め、感情を発散（表現）することは回復につながるが、それにはその人なりの回復の過程やペースがある。東日本大震災後の心のケアにおいて、支援者が被災者の状態を考慮に入れずに感情の発散をさせて回復を図ろうとすることは、回復を遅らせ２次障害につながるので禁忌とされた。

災害時の心理や心の健康について学校で学習する場合は、『ストレスマネジメント教育』が主流である。被災地の学校だけでなく全国各地で取り組まれ、授業の基本的な内容や構成も確立されており、実際に効果も実証されている授業方法であった。

指導案例に示したとおり、生徒が①ストレスについて学ぶ　②自分のストレスを知る　③リラックス（セルフコントロール）の有効性を理解する　④実生活に生かす、ことをねらいにする内容が、生徒自身の主体性を育む授業となる。

災害時の心身の反応を事前に知り、自分でストレスをコントロールできるような体験学習は、災害時の他に普段の学校生活の中でも役立ち、不登校やいじめの問題への予防のためにも良いと考えられている。授業を受け持つ先生方が指導できるように県教育センターの研修を活用することも考えたい。

また、災害時に「心のケア」をするのは専門家ではなく身近な安心できる人である。専門家は、身近で支援できる人のバックアップをする役割を果たす。災害時に備えて、身近な安心できる人がたくさんいるような環境作りが大切であり、なにより学級や友達関係がそうした場、関係であることが一番である。「心の健康」を保つためには、ストレスに対して自分一人で対応し、解決しなければならないのではなく、援助を求めることも大切な能力である。そうしたメッセージを送ることが大切だと考えられる。

7 【高等学校】ＬＨＲ・総合的な探究の時間等における指導案例 ⑥

（1） 題材 「地域性を踏まえた防災（ハザードマップの活用）」

（2） 題材設定の理由

昨今の気候変動による水害、土砂災害は甚大であり、避難経路の確保や日頃の心構えは喫緊の課題である。ここでは、科目「地理総合」での学習内容を深め、地域性を踏まえた防災について、自然災害の備えや対応などを多面的・多角的に考察し、表現することを目指すとともに、教科「家庭科」での学習内容と関連付けて、災害への「備え」の重要性を理解する。

（3） ねらい

対象とする地域の状況と関連付けてハザードマップを読み解き、地域の防災に対して意識を高めるとともに、災害に対してどのような備えが必要か考えることができ、実践することができる。

4） 展 開

過程	学習活動・内容	教師の支援	備考
導入	○本時の目的を共有する。 1 浸水害、土砂災害について ・災害が多発している現実を確認する。 ・高校の立地している地域で実際に発生した災害の実態を知る。 ・山梨県で浸水害、土砂災害が予想される地域がどこか予想する。 ・今後、想定される災害について理解を深める。	・動画等を用い、浸水害、土砂災害が甚大な被害をもたらすことを理解させる。 ・ハザードマップにより、浸水害、土砂災害が想定される地域を確認する。 ・実際に災害を経験した地域のお年寄りなどの話も引用する。 ・ハザードマップは、あくまでも想定上の浸水範囲を示すものであり、着色のない地域が安全ということではないことに留意する。例えば、中小河川の多くはハザードマップが整備されていないので、中小河川の存在にも目を向けさせる。	チャレンジ！防災48 フェアリーじじょ きょうじょ ハザードマップ ※「やまなしの防災教育」（山梨県 HP）等 立地市町村「地域防災計画」、「ハザードマップ」等
展開	2 ハザードマップの活用 ・通学時に災害が起きた場合の避難場所を確認する。 ・危険箇所に共通する特徴は何か、気づいたことを発表する。 ・指定避難所の位置を確認する。 ・どのような「備え」をすればよいのか、意見交換を行う。 ・避難するタイミングについて理解する。 ・なぜ日本は、浸水害や土砂災害が多いのかその理由を考える。	・通学経路別のグループをつくり、資料を準備する。 ・地形図と比較しながら考察する。 ・危険箇所や避難所を知ることは「備え」であることを理解させる。 ・各レベルの定義について理解させるとともに、情報に対して冷静に判断し、「自らの命は自らが守る」ために早めに行動することが大切であるとを確認する。 ・教科の学びと関連付ける	地形図 立地市町村「地域防災計画」、「ハザードマップ」等 警戒レベル 気象庁 HP パンフレット
まとめ	3 まとめ ・備蓄品、避難場所、連絡手段等をあらかじめ定めた「我が家の防災計画（浸水害・土砂災害）」を作成する。 ・この授業を受け、学んだことを災害時や日常生活の中でどのように生かすことができるのかまとめる。 ・作成した成果は、家族と共有したり外部に発信する。	・日頃からこれらに関心を持つことと、家族にも知識を伝えるように指導する。 ・「備え」の重要性を確認する。 ・「備え」はあらゆる災害において必要であり、例えば、地震ではどのような「備え」が必要か、教科「家庭科」での学びと関連付けて理解させる。 ・発信用の書式等を提示する。	

（5） 評価

① ハザードマップより、危険箇所や避難所、避難経路を確認できる（知・技）
② 災害に向けて、どのような「備え」をすればよいかわかる（思・判・表）
③ 意識を高め、日々の備えや行動に移す行動ができている（主）。

【参考】地域の教育資源や学習環境の活用

各学校が教育活動の質の向上を図っていくための方策として、地域の教育資源や学習環境を積極的に活用していくことが挙げられる。ここでは、その実践例として、身延高等学校で実施された「防災サマーキャンプ」について紹介する。

学校は地域社会における重要な役割を担い、地域とともに発展していく存在であることから、学校と地域の連携・協働を更に広げ、教育課程を介して学校と地域がつながることにより、地域でどのような子どもを育てるのかといった目標を共有し、地域とともにある学校づくりが一層効果的に進められていくことが期待される。

各学校の実態に合わせて活用していただきたい。

また、多くの学校において、地域の消防署と連携し、避難訓練に合わせて起震車や煙体験、簡易トイレ作成などの実践的な体験、訓練を行っている。近年、この活動を保護者や地域の方々と一緒に取り組む事例が紹介されており、家庭や地域等の連携や協働を通じて、生徒が地域の課題の改善に当たって一定の役割を担うとともに、生徒自身の成長にも寄与するという教育的意義を共有しながら、地域一体となって防災意識を高めていくことができる有意義な取り組みの一例といえる。

山梨県立身延高等学校　　防災サマーキャンプ　実施要項

１　目　的

地震発生時において、地域のために率先して働くことができ、所属校においてはリーダーとなって防災活動を推進していく意欲や知識を持った人材を、地域や町、県と協力して育成する。

２　積ませたいキャリア

人間関係生成・社会形成能力、課題対応能力、キャリアプランニング能力

・異校種間の交流を通じて、コミュニケーション能力を向上させる。

・「環境防災教育」の中で、地域の一員としての自覚を培う。

・将来への目的意識を持ち、卒業後の進路選択・決定できる能力を身につける。

３　開催日時・場所

令和●年●月●日（●）　８：３０～１６：２０　　山梨県立身延高校　輝葉館等

４　受講生

身延高校・身延中学校・南部中学校　　合計　約３０名程度

５　講座内容

～８：３０　生徒集合

８：３０　～８：４０　開講式

８：４５　～９：３５　講義　ー迫り来る巨大地震への対応ー　（県政出張講座）

９：４５　～９：５０　ワークショップのオリエンテーション

１０：００～１２：２０　ワークショップ①救命救急法　②避難所生活　③起震車・煙体験

（３つのグループに分かれ、40 分単位でローテーションする。）

１２：２０～１３：２０　昼食(非常食体験も含む)

１３：２０～１３：３０　ワークショップ④防災タウンウォッチングの説明

１３：１５～１４：００　ワークショップ④防災タウンウォッチング

１４：１０～１５：１０　ワークショップ⑤防災ハザードマップづくり（ＤＩＧ）

１５：１５～１６：００　防災ハザードマップの発表　１日のまとめ

１６：１０～１６：２０　閉講式

【ワークショップ ①～⑤の詳細】

①救命救急法　・・・・「ＡＥＤの知識確認」・「実技・胸骨圧迫心肺蘇生実技」
講師：峡南広域行政組合中部消防本部署員

②避難所生活　・・・・「簡易トイレ」・「ダンボール等での避難所づくり」の作成実技」
物品提供：身延町交通防災課

③起震車・煙体験　・・巨大地震で想定される震度や、火災時における煙の対処法などを体験。
講師：防災安全センター

④防災タウンウォッチング　・・・身延高校近隣を散策し、危険な箇所や倒壊しそうな家屋のチェックをする。

⑤防災ハザードマップ　・・・　タウンウォッチングの結果から、ハザードマップを班ごと作成する。

６　実施主体

主　催：　身延高校

講師等：　常葉大学草薙キャンパス社会環境学部、山梨県、身延町役場、
峡南広域行政組合消防本部（中部消防署）等

1　【特別支援学校】防災学習における指導案例　【中等部】【高等部】

（1）　題材　「地震から命を守ろう」

（2）　題材設定の理由

平成23年3月に起きた東日本大震災は東北地方などに甚大な被害を及ぼし、特別支援学校においても多くの命を失う事例が発生した。しかし、一方では、学校にいたおかげで被害に遭わずに済んだ子どもたちも多いとも言われている。

近い将来、本県にも南海トラフ地震など地震災害が起こると言われている中、生徒が教師など大人の指示に従って避難行動を取ることも重要ではあるが、自ら判断して危険を回避する行動を取ることは非常に重要である。

そこで、生徒たちが地震災害の危険を理解し、自ら安全な行動をとることができる力を育てたいと考え、本題材を設定した。

（3）　ねらい

①　地震発生時の危険や注意事項の学習を通して、命の大切さを理解するとともに、地震発生時に自ら身を守ることができる。

（4）　展　開

過程	学習内容及び生徒の活動	教師の動き及び指導上の留意点
導入	1　東日本大震災のときに、学校や家でどのようなことがあったか、自分がどのような行動をとったかなどを発表し合う。	・地震災害だけでなく、二次災害（火災や津波など）についても触れるように配慮する。
展開	2　地震の怖さや地震災害の危険などについて話し合う。 ・事前に知ることが難しい（突然起きる）。 ・どの地域でも起きる。 ・二次災害が起こる。 ・たくさんの命を失う。	・地震災害の資料等を活用し、生徒が地震災害に対する具体的なイメージを持てるよう工夫する。 ・話し合いから、命の大切さや自分の身を守ることの大切さを理解できるように発展させていく。
	3　南海トラフ地震について、知っていることを発表し合う。 ・いつ起きてもおかしくない。 ・地震が起こるとみんなの生活（学校や自分の家など）はどうなってしまうのか。	・南海トラフ地震という名称やそれに関する知識などを引き出すようにする。 ・南海トラフ地震に関する資料を活用し、具体的なイメージを持てるよう工夫する。
	4　南海トラフ地震が起きたときに、どのような行動を取ればよいのかを考え、ワークシートに記入するとともに、お互いの意見を発表し合う。 ・学校にいるとき ・一人で登下校しているとき ・夜寝ているとき ・休日街に出掛けているとき	・それぞれの生徒に応じた行動の取り方を用意しておき、生徒の実態によってとる行動も変わることが理解できるように配慮する。 ・生徒の実態に応じて、選択肢や○×方式など回答方法を工夫する。
	5　地震が収まった後、避難するときの注意事項を場面ごとに整理・確認し、ワークシートにまとめる。 ・教室からの避難 ・周囲に誰もいないときの避難 ・怪我をしているとき ・二次災害（火災）が起きたとき	・必要に応じて、実際に練習するなどして対処方法を身に付けられるように工夫する。 ・避難所マークの理解や最寄りの避難所の確認、周囲の人への支援依頼の方法など、実際の場面を想定して、生徒が具体的にどのよう行動したら良いかイメージできるよう工夫する。
まとめ	6　本時の学習の振り返り	・地震災害に遭ったときの対処方法をいくつかのポイントにまとめて理解を促す。 ・一番大切なことは「まずは自分の身を守ること」であることを再度確認する。

２ 【特別支援学校】避難訓練における指導案例 【全学部】

（１） 題材 「防災訓練」

（２） ねらい

① それぞれの災害に応じた安全な行動をとることができ、災害時に自ら身を守ることができる。
② 災害が起きた時の避難の必要性を知り、教師の指示に従い、安全に避難することができる。

（３） 展 開

過程	学習内容及び生徒の活動	教師の動き及び指導上の留意点
導入	１ 地震が発生したときに大切なことを発表し合い、そのポイントを知る。 【地震発生時のポイント】 ・まず落ち着く（慌てない）。 ・危険から身を守る。 ・周囲に誰もいないときは、人を呼ぶ。 ・大きな揺れがおさまったら避難する。	・これまでの防災学習などで学んできたことを思い出させながら、児童生徒等から大切なポイントが出てくるように工夫する。
展開	２ 地震の後に火災が発生したことを受けて、避難する際に大切なことを発表し合い、避難するときの自分の目標を決める。 【例】 ・煙を吸わないようハンカチで鼻と口を覆う。 ・無駄話をせず、素早く避難する。 ・教師（放送による）の指示に従う。 ・走らない。 ・困ったことがあったら周囲の人に助けを求める。 ・車椅子の友だちの手助けをする。	・火災が起きたときにどんな危険が起きるのかが具体的にイメージできるように、視覚教材等を用意する。 ・それぞれの児童生徒等の実態に応じた目標を用意しておく。
	３ 避難経路を考える。	・具体的な避難場所を設定し、伝える。 ・校舎配置図などを使い、火災発生場所や避難場所が視覚的にわかるように配慮した上で、避難経路を考えさせる。 ・実態に応じて、火災発生場所を複数設定するなどし、臨機応変に避難経路を考えることができるようにする。
	４ 避難指示の放送に注目させ、実際に避難を開始する。	・各自で決めた目標を意識させながら避難させる。
	５ 避難場所に集合し、講評を聞く。	・クラス全員が揃っていることを確認し、安全に避難できたことを評価する。 ・課題があれば具体的に指摘し、望ましい対処の方法をわかりやすく伝える。
まとめ	６ 本時の訓練の振り返り ・各自の目標について自己評価し、発表し合う。	・災害に遭ったときの対処方法をいくつかのポイントにまとめて理解を促す。 ・一番大切なことは「まずは自分の身を守ること」であることを再度確認する。

Ⅸ【「青少年赤十字防災教育プログラム　まもるいのちひろめるぼうさい」　】

「災害に備える」　　(45 分)　　対象／小学生用（４-６年）

使用するＤＶＤチャプター：A-0 命を守る防災（イントロダクション）、A-1 様々な自然災害、A-14 命を守るための備え（建物編）、A-15 命を守るための備え（備蓄編）、A-16 命を守るための備え（情報編）、A-18 命を守るための知識
活用できる教科・領域：社会、理科、体育、総合学習、特別活動

1. プログラムの趣旨
災害には日頃の備えが重要である。日頃の備えを多面的に学ぶことで、災害から自分のいのちは自分で守ることを意識させる。

2. ねらい
❶災害に対する日頃の備えについて学ぶ。
❷正しい情報を入手することが生き抜くためには役立つことを学ぶ。
❸いのちを守るための知識を常に新しいものにしておくために、地域の避難訓練などに積極的に参加する意識をもたせる。

3. 展開

段階	学 習 内 容	教師の支援・指導上の留意点
導入 （１０分）	①「災害」のことばの意味を考える。	●「災害」について知っているか、どんなことか話し合い、DVD の A-0、A-1 を見せる。 ▼すでにこのチャプターを見ている場合は省略し、前回の授業のふり かえりを行う。
展開 （３０分）	② 災害への備えについて学び、災害に対しては、日頃の備えが大切であること を学習する。	●DVD の A-14、A-15、A-16、A-18 を見せる。 【家の中の危険に備える】 ・家具や家電にストッパーをつけたり、倒れても影響が少ない場所に移動する。 ・部屋の中に靴やスリッパを用意する。 ・日頃から家の中の何が危ないか、どこが安全かを家族で話し合う。 【家庭での備蓄をする】 ・災害が起こって救助が来るまで目安は 3 日間。3 日間生きられる備えが必要。 ・自分用の避難バッグを用意し、無理なく持てる重さにおさえ、すぐに持ち出せるところに置いておく。 ・避難が最優先される津波や洪水においては、モノを置いて避難し、いのちを守ることが重要。 【家族で事前に話し合う】 ・どこに集合するかを決めておく。 ・ハザードマップなどを見ながら、一時的に避難する「避難場所」と長期的に避難する『避難所』を確認しておく。 ●「ふりかえってみよう！」の画面が出たら、ワークシート 7 を配付する。
	③ 災害への備えの重要性を理解する。 災害に備えて、家庭であらかじめ備蓄をしたり、危険を話し合ったりすることが必要であることを理解する。	【ワークシート 7】災害に備えて、どんな準備をしていますか？ ▼このワークシートは、この場で記入して回収するのではなく、家に持ち帰り、家族と話し合ってから後日提出するものであることを説明する。 ▼その際に、ただワークシートに記入するのではなく、実際に防災への備えを考えて備蓄などを行うように薦める。
まとめ （５分）	④ 防災への意識を高め、普段から災害を想定した備えを行うことを確認する。 ワークシートを持ち帰り、家族で話し合いをさせることで防災の意識を高める。	▼教師が、自分の家で行っている備えなどを説明し、家庭でのワークシートの取り組みがしやすくなるようにする。 ▼自分の身を守るだけでなく、学んだことを家族や他の人にも伝えていくことが大切であることを確認する。

ワークシート７「災害に備える」

年　　組　　番　　名前

ふりかえってみよう！ 災害に備(そな)えて、どんな準備(じゅんび)をしていますか？

チェックリストにあるものをバッグにつめて、一人ひとつ避難(ひなん)バッグを作ってみましょう。

❶家族と話し合いながら、下のチェックリストを活用して災害に備(そな)えましょう。

貴重品

- □ 現金（小銭をふくむ）※公衆電話用に10円玉、100円玉も
- □ 印鑑

※以下の２つは、現物を持ち出せなかった場合に備えて、コピーを入れておく。

- □ 健康保険証
- □ 身分を証明できるもの（学生証、パスポートなど）
- □ 予備の眼鏡

情報収集用品

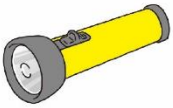
- □ 携帯電話（充電器をふくむ）
- □ 携帯ラジオ（予備電池をふくむ）
- □ 家族の写真（はぐれた時の確認用）
- □ 家族との災害時の取り決めメモ
- □ 筆記用具

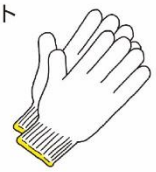
食料など

- □ 非常食
- □ 飲料水

便利品など

- □ ヘルメット
- □ 懐中電灯（予備電池をふくむ）
- □ 笛やブザー（音を出して居場所を知らせるもの）
- □ 万能ナイフ
- □ 使い捨てカイロ
- □ マスク
- □ ビニール袋
- □ アルミ製保護シート
- □ 毛布
- □ スリッパ
- □ 軍手





便利品など

- □ マッチかライター
- □ 給水袋
- □ 雨具（レインコート、長靴など）
- □ 簡易トイレ

清潔・健康のためのもの

- □ 救急セット
- □ 常備薬・持病薬
- □ タオル
- □ トイレットペーパー
- □ 着替え（下着をふくむ）
- □ ウェットティッシュ
- □ 生理用品
- □ 歯みがきセット

❷上のリストのほかに、自分が必要だと思うものを書きましょう。

❸家族と相談して、集合場所や約束ごとを決めて、書きましょう。

ワークシート回答例

ワークシート７「災害に備える」

❶家族と話し合いながら、下のチェックリストを活用して災害に備えましょう。

貴重品
- □現金（小銭をふくむ）※公衆電話用に10円玉、100円玉も
- □印鑑
- ※以下の２つは、現物を持ち出せなかった場合に備えて、コピーを入れておく。
- □健康保険証
- □身分を証明できるもの（学生証、パスポートなど）
- □予備の眼鏡

情報収集用品
- □携帯電話（充電器をふくむ）
- □携帯ラジオ（予備電池をふくむ）
- □家族の写真（はぐれた時の確認用）
- □家族との災害時の取り決めメモ
- □筆記用具

食料など
- □非常食
- □飲料水

使い捨てなど
- □ヘルメット
- □懐中電灯（予備電池をふくむ）
- □笛やブザー（音を出して居場所を知らせるもの）
- □万能ナイフ
- □使い捨てカイロ
- □マスク
- □ビニール袋
- □アルミ製保護シート
- □毛布
- □スリッパ
- □軍手

使い捨てなど
- □マッチかライター
- □給水袋
- □雨具（レインコート、長靴など）
- □簡易トイレ

携帯・提供のためのもの
- □救急セット
- □常備薬・持病薬
- □タオル
- □トイレットペーパー
- □着替え（下着をふくむ）
- □ウェットティッシュ
- □生理用品
- □歯みがきセット

❷上のリストのほかに、自分や家族が必要だと思うものを書きましょう。

例：普段つかっている薬、ぜんそくの吸入器、（冬の場合）防寒具など

❸家族と相談して、集合場所や約束ごとなど、決めておくべきことを、書きましょう。

例：避難所である○○小学校に集合する

災害後、３日間はできるだけ避難所から動かない

指導のポイント

このワークシートは家に持ち帰って記入してもらう必要があります。後日回収し、目を通した後に返却して家で保管するように指導してください。また、後日の提出を求めず、家庭での話し合いを薦めるなどの方法も考えられます。

※イメージです。